しくしてゐた。さうしてこの人から非常に傾聽すべき說を聞いたので自分は益友であると信じてゐた人でありますが、併しながら其の中で俳諧の所謂發句に季がある譯を美學から論じ種々の意見をきかされました。其處で私は俳諧は連歌から出たのである。連歌に於ては發句といふものは必ず其の詠む時の季節を詠まなければならぬものである。時節を詠まなければ連歌の發句にはならない。其の習慣がその儘俳諧に入つて來て居るのだと僕は思ふ。どうしてさういふ習慣をつけたかといふ論になれば或は美學も必要であるかも知れぬと思ふが、これは連歌と俳諧と共通した特徵だからそれをたゞ俳諧の特徵と考へたり、又はいきなり美學から說くのは無理であらうと申しました。それから其の人は發句に季のある理窟をいはなくなつて仕舞つた。如何に外國の美學文學に長けて居つても、日本の國の俳諧の歷史を知らなければ分らぬものであります。連歌の上に於ても同樣で何も知らないで偉さうな事をいつてゐても、それは其の人の勝手ですけれども我々は連歌とも發句とも認めない。所が此の節俳諧を研究して居るのを見ると隨分滅茶苦茶のものも見えるやうである。それも唯自分が可いと思へば可い、惡いと思へば惡いのだといふ風にいたしますけれども、芭蕉といふ人は割に謹敕な人で、如何に自分が新らしい正風といふやうなものを起したにしてもさういふ滅茶苦茶な事はやつて居らぬ筈であります。でありますから我々が芭蕉の發句を見る時は第一何處で何月頃に詠んだといふ事を考へて味ふべきでありませう。空間時間を考へないで發句を味ひ俳諧を味ふといふ事は出來ない筈であります。さういふ約束をちつとも知らないで、若くはそれを無視して之を研究したつて研究にはならぬ。最もさういふ人の御自身の主觀はそれで差支へないことでせう。それは何をしても構はぬが苟も古人の作品を研究するにはさういふ事情があるといふ事を知つて居らなければならないのであります。

さて連歌の發句はどういふ風に詠んだかといふ實例が玆にあります。御存知の十六夜日記の著者であります阿佛尼は連歌の達人でありました。此の人が鎌倉に下りました時には連歌が盛んでありました。其處で阿佛尼といふ有名な人が來たから發句を貰はうといふので發句を貰ひに行つたのであります。其の日は九月の晦であつた。舊曆でいふと九月といへば秋の終りであります。發句といふものは大抵名人とか偉い人に貰ひましてそれを本にして連歌をやるのであります。其の時に「けふは早秋の終りになりにけり」といふ發句を吳れた。其の發句を貰つて來て皆が百韻の連歌をやつた。翌日又連中が阿佛尼の所に貰ひに行くと阿佛尼は宜しいといつて「けふはまた冬の初めになりにけり」といふ句を吳れた。昨日は秋の終りで今日は十月朔日ですから冬の初めです。卽ち連歌の發句は其の時を詠むべきもので、其時節を外にしたのでは駄目なのです。其の習慣がずつと鎌倉時

代以後續いて來て發句には季を入れなければならぬといつて居る。其の歴史を知らない空理空論はどんな美學を持つて來ても其の解決はつかない。其處迄溯つて何故さういふ事があつたかと考へる。其處に初めて理窟をいふべきことになるのであらうけれども俳諧だけ切り離して理窟をいつても、どうしても私共には承知出來ない。とに角從來の日本の文學の研究に於て連歌俳諧の研究といふものが誠に蕪雜なものであります。之れで日本の事が研究出來てゐるといへる筈がない。

普通には五七五の十七字が發句であるといふが、併しながら發句はそんな簡單なものではない。五七五の十七字を持つて來たら發句になるかといつても發句になるとは限らない。發句になるには十七字の形の上に一つの詩歌であるといふ纒りがついて居らなければならぬ。其の形の上に一つの纒りがつくといふ事をば切れ字があるかないかといふ事で論じてゐる。此の事は俳諧をやつて居る人は芭蕉が云つたと思つて居るかもしれぬが、此を喧しくいつてゐるのは宗祇であります。けれども決して宗祇に始まつたのではなく自分共の見る所に依ると今より九百年程前源俊頼が書いた俊秘抄秒といふ歌の作り方を書いた書があります。その中に既にいつてゐる。其の頃の連歌は唯二句たけでありますが凡て呼びかける方の句は、その意味が完結して居らなければならぬといつて居る。それが連歌なり俳諧なりの發句が獨立の意義と獨立の形とを持つて居なければならぬといふ事をいひ出した起源であります。發句の上に獨立の形と意義とを要求した起源は芭蕉でも宗祇でも、又阿佛尼にでも定家卿でもない。金葉集といふ勅撰集の撰者源俊頼の時にさういふ事を既にいつて居るのであります。それが歴史の上にずつと續いて來て居るのであります。

又俳諧に月花が幾つ入らなければならぬといふやうな事をいひますが、其の本を探して見まするとやはり連歌にある。是は連歌の初めには此處で花を詠まなければならぬ。此處で月を詠むといふ事は定つて居らなかつた。唯一番初めは雪月花の三つといふものは非常に風流なものとして尊んでそれを面白くいはうといふやうな要求が本らしいのであります。それが段々變つて來まして遂に雪は何處でも宜しいが月と花はどうしても斯うしなければならぬといふことになつた。終ひには連歌の方で申しまするとし、紙一枚一折の中に花一ヶ所は詠まなければならぬ。百韻の連歌に花が四ヶ所出なければならぬ。月は表一ヶ所、裏に一ヶ所全部で八ヶ所出なければならぬといふ規則が二條良基の時代に既に出來て居る。それが段々變遷して來て芭蕉の俳諧にも月が幾つ花が幾つといふ事をいつて居る。是等も連歌の方から導かれて俳諧の上に現はれて來たのであります。兎に角俳諧をば本途に研究する人は一面に於て此の文藝を味はうといふ事は勿論必要でありますが、同時に一面に於て歴史的の研究をやらなければならぬ。さうしなければ意味が通らない。歴史的の研究をやると

すれば勢ひ連歌に溯らなければならぬ。さういふ風に考へられるのであります。

連歌は室町時代に一番盛んで殆ど韻文界の全部を占めて居りますが、俳諧と連歌とが江戸時代には韻文界の半分を占領するやうになつたのであります。平安朝時代の末頃から連歌が段々起つて鎌倉時代へと盛んになつて室町時代に來たのであります。かの千早城を攻めた時に關東の軍勢が一所懸命に攻めるが楠正成が降參しない。徒然のあまりに攻擊軍が一萬句の連歌をやつたといふ程それ程流行つて居たのであります。所が室町時代の文學史には連歌が流行つたといふ事は書いてあるが、連歌がどういふ風に流行つてどういふ位地にあつたかといふ事は何も書いてない。徳川時代には俳諧こそ分つて居るけれども連歌は徳川時代には全然ないやうに書いてある。

室町時代には歌といふものの勢力が衰へて連歌がそれにかはつて流行したといふ其の著しい證據は、室町時代の永享十一年に……歌の勅撰集といふものが古今集から始まつて二十一代續いて居りましたが、それが永享十一年後花園天皇の時に新續古今集といふものを勅撰せられました。それが所謂二十一代集の終りであります。五百年程天皇の勅命に依つて歌集を撰するといふ文學上の事業が終りを告げ、それから後は日本に勅撰集はない事になつた。その頃から歌といふものの權威は地に墮ちて居る。其の前後に當つて二條良基が筑波集といふ連歌の集を出した。是は連歌の歴史上尊いものであります。それは北朝の延文元年に出來た。それを北朝で勅撰集に準ぜられて居る。永享で勅撰の和歌集が終りを告げて後六十年明應年間に宗祇が新撰筑波集を撰びそれが勅撰に準ぜられて居る。之を以て見ても連歌が歌に取つて替つたといふ事を見る事が出來ると思ひます。さういふ時代の韻文を研究するには連歌を無視する事は出來ないのであります。

鎌倉時代の半以(ナカバ)後から連歌を專門にやる所謂連歌師といふものが起つて來た。此の連歌師なるものは連歌が盛んになつて來ると同時に勢力を得て來て、室町時代の文學の全權は連歌師に握られて仕舞つた。又連歌師になるには非常に勉強しなければならなかつた。宗祇が連歌を學ばんとて兼載に問うた所が連歌を本當にやるには二十年もやらなければ駄目だといつた位なので一通りの苦心ではなかつた。宗祇は兼載の先輩だからこれは俗説であるが、しかし、連歌師の苦學した事はこの俗説でかへつて知られるのである。此の連歌師は連歌のみに苦心するのではなく、其の道の助となるべき歌なり物語なりを盛んに研究したもので、歌でも物語でもそれがどういふ事か知りたい時には連歌師に聞けば分るといふ風になつた。斯くて文學の全權が連歌師の手に入つたといふのも連歌師が非常に勉強したからであります。源氏物語が彼れ程勢力を得たといふ事も實は連歌師が居つて始めてそれが傳つて來たのであります。それはどういふ譯かといふと連歌の中には少なくとも一ヶ所

は源氏物語にある話を詠はなければならぬので源氏を知らない者は連歌を詠めない。連歌を少しでもやらうといふ者は皆源氏物語を讀む。又讀まないでも連歌を一所懸命にやつて居れば獨りでに源氏物語が分る。一度連歌をやれば源氏物語の話が二つ三つはキット出る。それを何だときけば、ここに源氏の話をよみ込んでゐるといふことがわかる。さういふ次第でありました。それ故に源氏の注釋書を御覽になると分りますが、それ等の多くは連歌師のやつたものであります。それは源氏物語のみならず、大和物語であらうと、萬葉集であらうと、古今集であらうと、大體平安朝時代の文學は皆連歌師の力に依つて事實傳つて來て居るのであります。其の殘りを我々はしやぶつて喜んで居る。其の美味いものに涎を流すのは宜しいが、貰つて嘗めて居る人が連歌師の恩惠を知らない。さうして連歌師とは何者かと輕侮してゐるといふ譯で甚だ可笑しな話であります。

源氏物語の注釋湖月抄は誰が書いたかといへばそれは北村季吟であります。北村季吟は何者か、彼は連歌師であります。松永貞德の門人である。枕草子、大和物語、伊勢物語等の注釋もさうであります。北村季吟は昔からある種々の說を網羅してその要をとり中庸を得た注釋書を著したので、若し一人の北村季吟が居らなかつたなら今日平安朝文學の研究はどれ程苦しいか知れぬのであります。現に源氏物語の全部の注釋は季吟の書いた湖月抄より前にはありますが、後のものには他に今は殆んど用ゐないでせう。さういふ譯で現在の日本文學をやる人は連歌師の恩惠を被むらないものはない、連歌師の恩惠を被むらないといつたら罰が當りませう。どんな偉い人でも皆被むつて居るのだが、それは誰もいはない。獨りでに大きくなつたやうに考へて居る。餘程不思議な話であります。

尙ほ又今日殘つて居るものでなくして此の連歌師がどれ程社會的勢力を持つて居つたか。どれ程文學の上に權力を持つて居つたかといふものを見るに古今傳授といふことがあります。今日から見ると詰らぬものと見えるが、いはば卒業證書のやうなものであります。それには愚にもつかぬやうな事が書いてありますが、それを持つて居らなければ宗匠でない。其の古今傳授なるものが鎌倉時代から歌道の宗家と立てられた定家卿の家からずつと傳つて來て東常緣に迄傳つた。常緣は歌詠みであつたが此の人に古今傳授を受けたのは誰かといふと連歌師の古今第一の名人の宗祇であります。當時の文學者として宗祇程卓越した人はなかつたのであります。だから宗祇に傳へるより仕方がなかつた。宗祇が受けてからは之を三條西實隆に傳へた。實隆は之を公條に、公條は實枝に、實枝から有名な細川幽齋に傳へた。幽齋といふ人は矢張り連歌の名人であります。此の人が古今傳授を誰にも傳へない內に石田三成と德川との騷動が起つた。幽齋が丹後の田邊、今の舞鶴で暫く籠城して

石田方に攻められ、どうにもならなかつた時に、勅使が立つて、古今傳授を傳へて居る細川が死んだら日本の古今傳授が亡びる。だから和解しろといふ事になつて、細川幽齋は城を明け渡して高野山に入つた。當時それ程重んぜられた古今傳授が誰によつて傳つて居るかといふと連歌師によつて傳つて居る。其の内に於て彼の宗祇は此の古今傳授をもう一つ牡丹花肖柏に傳へた。この人は和泉の堺に居りましたので普通堺傳授と申します。牡丹花肖柏は奈良で饅頭屋をして居つた林宗二といふ人に傳へた。之を奈良傳授と申します。今迄定家卿の二條家でなければ傳へなかつたといふ一種の神秘的の考へで居つたのでありますが、さういふ神秘的の傳授が連歌師から連歌師に傳つた。即ち連歌師は連歌のみならず文學の全權を握つた。唯だ權利のみならず實際それだけの勢力を持つて居つたのである。それはそれだけ勉強して居るから實權が歸するのは當然であるといはねばならぬのであります。

又連歌といふものが室町時代の人にどういふ風に感ぜられて居つたらうかといふと、是は餘程面白いのであります。連歌をやれば戰に勝てる。何でも戰爭する前に連歌をやる。御祈禱のために連歌をやるといふ事までやつたのであります。例へば今川氏親が出兵する前に三島神社に參籠致しまして連歌一千句をやつた。之を出陣千句といひます。又永正二年に會津の蘆名氏の父子相戰つて居る。兩方へ和解をさせようとして兼載が一所懸命祈禱連歌を詠んでやつたので和解したといふ話もある。さういふ風で連歌は當時の人に信仰せられて居つた。それでありますから連歌といふものはたゞ文藝史の上のみならず、社會なり思想なりの上に餘程影響して居るのであります。

又明智光秀が織田信長を弑さうと企てた前に愛宕山に上りまして連歌をやつて居る。其の時に明智光秀の發句は「時は今天ケ下知る皐月かな」といふのであります。其の時は誰も氣が附かなかつたが此の連歌を後から考へて見れば、明智が天下を取るぞといふ事を句にした呪詛の連歌であつたものに相違ない。(「時」は土岐氏で明智の本姓である。)それを相手をした紹巴(ゼウハ)といふ連歌師は知らなかつた。——或は知つて居つたか分らぬが、——其の後太閤に非常に怒(オコ)られたといふ事である。其の時に紹巴も偉い男で、愛宕山に行つて其の連歌を書いた懐紙を見せて貰つて、こつそり、「天ケ下知る」の「知」の字を削つて又「知」の字を書いて知らぬ顔をして居つた。そして太閤の前に出た時に「是は誰か『知る』と直したものであります。私のやつた時には『なる』でございました」と云つたので、それで許されたといふ事であります。彼の明智のやつた事といふものは日本の歴史の上に見て非常に重い事です。明智が信長を弑さなければ太閤は出られなかつたであらう。明智が信長を弑したから太閤が出て來たのである。日本の歴史が彼の光秀の行動に依つてどういふ變化を

して來て居るかといふ事を考へた時に、彼の發句は非常に關係のあるものになつて來るのであります。啻に歴史の上のみならず、文藝史のみならず、當時の人が連歌といふものに對してどういふ風に考へて居つたかといふ事を考へて見て其の連歌を見ると、非常に恐ろしい意味も出て來るし、非常に面白い事も出て來るのであります。

謠曲の狂言といふものは大體室町時代に出來たものでありますが連歌に關した狂言が大分あります。それを見ると當時の人が連歌に對してどういふ感じを持つて居つたかといふ事がよく分る。其の中に連歌盜人といふのがあります。それは當時連歌が非常に流行りまして一月に一回か二月に一回グル〳〵廻りで各自の家で連歌の會をやるのですが、段々頻繁にやつて居る内に其のために貧乏になつて仕舞つた。併し連歌が好きでやらずには居られないといふ所から友達と相談した末、或る家へ行つて要る物を默つて借りて來ようといふ事になつて夜中に其の家に忍び込んだ。すると其の家の床の間に連歌の懐紙が掛つて居る。それを見た二人はこれは面白い、此の發句で一つやらうぢやないかといつて盜みをする事を忘れて座り込んで連歌をやつて居る。其處へ主人が目を覺してやつて來て見ると知らぬ者が二人で連歌をやつて居る。結局主人も面白くなつて其の中に入つて連歌をやり、盜人達は結構な物を貰つて返るといふのであります。又八句連歌といふのがあります。是は借金をしたが返せない。貸した者が催促に行くと何時も裏から逃げる。或る時貸主がそれを承知で裏へ廻つた所がぶつかつた。所が話をして居る内に何時か連歌を始め面八句をやり借金の事は忘れて仕舞ひ遂には無理に證文をかへしてやつて仕舞ふといふのであります。其の他毘沙門さんから福を貰ふ連歌の狂言、連歌が本で夫婦喧嘩をし、又連歌によつて仲が直る狂言等種々なのがあります。兎に角連歌といふものは當時世俗に面白いといふ感じを起させて居る。それに連歌の入つて居る狂言は皆結果が好い。泥棒が物を貰つて行く。借金して逃げ廻つてゐたが、嫌だといふのに無理に證文を返される、夫婦喧嘩の仲が直るといふので、兎に角連歌其のものを種々よい方の意味で迎へて居つたのであります。それは室町時代であります。さういふ傳統を引いて來ての連歌であります。それ故に全然之を無視して日本の文藝の變遷とか日本の歴史の或る部分、或は日本の思想の或る部分がわかり切つて仕舞つたとはいへないのであります。又揚句の果は酷い目に合ふといふ事がありますが、その揚句といふのが連歌の最終の句の事であります。又差合(サシアヒ)だの、去嫌(サリキラヒ)だのといふ俗語も連歌の用語であります。さういふ風に日常語の上にも連歌の影響が殘つてゐるのであります。

又此の連歌なるものは支那の聯句との關係を見ますれば、非常に面白いものでありまして、支那の聯句が本邦に非常に盛に行はれたと共に連歌も盛になつた。其證據には連歌の百韻といふのは是

は聯句の方の百韻とか五十韻とかいふ其の言葉を其の儘眞似したので、百句とも百韻ともいふ。事實いひまするとと平安朝の末から鎌倉時代の初め迄支那の聯句は非常に盛であつたが同時に連歌も盛であつた。或る時は聯句と連歌と一緒にやつたりして居る。それから發句といふのは先程も申す通りの連歌の一番初めの句であるが其の本は詩でいふ名目であります。平安朝時代には詩の第一句を發句といつて居ります。それを連歌の方で眞似をしたのであります。さういふ風に較べて來ると日本の連歌は支那の聯句の影響に依つて著しく發達したといひ得るのであります。扨てさういふ風にして發達して來ましたが、支那の聯句は何人かゞ寄つて詠んで一首の詩になる。所が日本の連歌は鎖式で第一句と第二句とは關係があるが、一句隔てた前の句とは離れなければならぬ。三つくつついた連歌は拙だといふ事になります。室町時代には日本流の連句も非常に盛になりまして、殊に五山の僧侶は非常に連句を致しましたが、其の方式は連歌と同じであります。即ち支那から傳つて來た連句迄が連歌の影響を受けて日本化して仕舞つた。さういふ連句は支那には一つもない。或は又支那の詩句と日本の連歌の一句と替り〳〵にやる事が行はれるやうになりまして漢和といつたり和漢といつたりしました。漢和といふのは發句が詩の句で、歌の句でつける。其の中には漢即ち詩の句が二つ並んだりするけれども必ず一番終りの揚句は日本の歌の句で終らなければならない。それが和漢といふと發句は日本の歌の句で起つて一番終りが支那の詩の句で終る。此の漢和とか和漢とかいふものも日本獨得の事でありますけれども是は連歌程盛なものではないのであります。

極めて蕪雜な事を申しましたが、大體連歌といふものがどれ程の地位を日本の文藝史の上に於て占めるべきものであるかといふ事は凡そ御感じになつただらうと思ひます。我が國の文藝史の上から連歌といふものを全く除いては到底解決の出來ない問題が澤山あるといふ事になる。連歌を研究しないでは日本の文藝の實相が全然分らぬとは申しませぬ、が大分分つては居りますが、全部分り切つて仕舞ふといふ事はいへない筈であると思ひます。日本の文藝の研究は大分出來ましたけれども、茲に一つ大きな缺陷がある、即ち連歌の研究であります。之が補はれて仕舞はなければ、本途の日本の文藝史はどんな簡單なものにしても本途に系統的のものを得たといふ事は出來ないと思ひます。要するに今日は連歌の研究に注意を向けて頂きたいといふ事を申上げたのであります。

（これは大正十五年秋に日本大學で公開講演として講演した時の筆記であつて、昭和二年三月、四月の雜誌宇宙にのつたのを一二訂正したものである。）

連歌研究の序說

余は今この題目の下に連歌研究の必要と、その研究の主要點との大略を說かむとす。

連歌を研究することの必要は日本文藝史の上に於いて最も急なるを見、次に日本文藝の特殊相の一端を見むが爲にも亦その必要を感ずるものなりとす。

先づ本邦の文藝史の研究の從來の成績を見るに大體よりいへば、平安朝時代の研究最も進み、江戸時代の研究之に次ぎ、奈良朝時代更に之に次ぎ、鎌倉時代より室町時代にかけての研究最も後れたり。そがうちにも室町時代の文藝史最も貧弱なりと見えたり。而してさる現象を呈せる事由を考ふるに、その鎌倉室町兩時代の文藝が他の時代に比して劣るといふ點も多少は存すべきが、しかもその主なる點は連歌の研究の行はれざるに基づくものと考へらる。

連歌は之を歷史的に大觀すれば、二句唱和の連歌にはじまり、百韻五十韻の長連歌に發達せしものなりとす。而してその端は既に萬葉集にあらはれ、二句唱和の連歌は平安朝時代の中頃に漸く盛

んになり、同時代の末頃にはその盛んなること古今に比なくなれり。しかも、その頃より數句をくさりつづくる連歌起りて五十韻百韻の連歌の漸をなせり。かくて鎌倉時代の初期には百韻連歌すでに形を整へたりしが、同時代の中頃以後よりこの長連歌は長足の發展をなし、二句唱和の連歌はなほ存したりしかど、勢力の中心は長連歌にうつり、爾來漸次に勢を逞くし、後には連歌といへば、專ら五十韻百韻の長連歌をさすこととなれり。

連歌はそのはじめ二句唱和の時代には卽興的のものにして多くは機智を弄するに止まりしが、その盛んなるに及びては卽興的機智的なる上に更に滑稽を趣味としたるものあり。いづれにしても遊戯文字と目すべきものなるが、或は和歌者流の餘技として弄ばれ、或は和歌會の餘興として催さること多かりき。この和歌と相待ちて行はれしことはこれ連歌の歷史の上にては頗る注意すべき現象にして優美を主とし、ややもすれば、拘束の嚴に失せむとしたりし和歌に對して自由奔放の境地と滑稽諧謔の趣味との存立を要求せるもの蓋し當時の連歌なりしならむ。されば大體よりいへば、この頃の和歌と連歌とは恰も能と狂言との間に存する如き關係を以て相待ちて行はれしものの如く見えたり。而して和歌に對しての此くの如き關係は、この種の連歌の興るべき境地と目せらる。こに於いて考ふべきことはこの種の連歌の興れることは種々の因緣ありしによることはもとよりな

れど、その根柢には國民の文藝上の要求の必然の境地よりして勃興し至りしものといふべきなり。

かく奔放と滑稽とを生命として勃興したりし連歌もその進んで、五十韻百韻の連歌となるに及びてはその間にも又優美を主とする有心宗の連歌と滑稽を主とする無心宗の連歌との別を生ずるに至り、もと和歌と連歌と相對して存立せし關係に似たる狀態をば、連歌のうちに於いて分化對立せしむるに至れり。これ實に鎌倉時代の初期に於ける事實なり。かくて鎌倉時代の中期以後、その有心宗の連歌は無心宗の連歌を壓倒し、爾來連歌といへば、優美を主とする長連歌をさすこととなりしが、その連歌は漸次に發展してその勢力を增し、後和歌界の壘を摩し、和歌の道の漸くに衰ふるに反し、連歌の道は漸くに盛んになり、終には全く和歌を壓倒し了りぬ。これ實に室町時代の文藝界の主たる現象なりとす。

今上述の現象を一二の事實に徵していはば、先づ和歌集の勅撰の沙汰やみて、連歌集のかへりて勅撰に准せらるる事となれるもその一なり。古今集以後連綿絶えざりし和歌集の勅撰は第二十一代の勅撰集と目せらるる新續古今集が、後花園院天皇永享十年に撰せられしを最後として、この五百年間繼續せし日本文藝史上の一大事實は永く絶えはてたるなり。然るに北朝の文和二年に二條良基が救濟法師と心を合せて編纂せし連歌の集たる筑波集は勅撰に准せらるべき事となりしが、この時は和歌集の勅撰のなほ行はれてありし時なれば、姑く論せず。後、明應四年に宗祇が新撰筑波集を編せし時また勅撰に准せらるべき宣下りぬ。これ實にかの永享十年より五十九年の後なりとす。かくの如き現象は連歌が和歌を壓倒せしが爲に起れるものなりとは必ずしもいふべきにあらずといへども和歌の勢力のいたく衰へたるを示し、反對に連歌の勢力の甚だ盛んなりしことを語るものたることは疑ふべからざるなり。

次には連歌師が歌文の道の實權を握りし事なり。之につきては種々の事實を見るをうべきが、余はここに古今集の祕事傳授と歌文の研究との上につきて語るに止むべし。古今集の祕事傳授は俗に古今傳授といはるるものなるが、その實質は今日の目より見れば、學術上殆ど一顧の價値も無きものといひつべきものなれど、しかも、それらは當時歌道の極祕とし、神聖なるものとして之を傳へしものと見ゆ。惟ふに、そのはじめは、その道の修養を重んぜし事より起りしものなるべきが、漸く神祕的になり、後には之を傳ふるもの、卽ち學道の正統にして、之を後に傳へおかずば、その道絶えむと信ぜられたり。この故に之を傳ふる事はその和歌の道の生命の存する所以を示すものとも考へられたり。而してその道の神聖を維持せむ爲に、濫りに授くることなく、その道の第一人者を擇びて、嫡々相傳せしものたるなり。この古今傳授は歌道の宗家二條家より傳はれるものなるが、

東常縁之を傳へて保てりしを連歌道に於ける當時の第一人者宗祇は、文明三年に之を常縁より授けられて傳へ保てり。これ宗祇が、當時歌文界の最高權威たりしことを確認せしむる社會的の一制度なりといふべし。かくて宗祇は之を時の有識三條西內大臣實隆に傳へ、實隆よりその子公條に傳へ、公條よりその子實枝に傳へ、實枝より細川幽齋に傳へたり。宗祇は又別にその門弟牡丹花肖柏等に傳へたるあり。之を堺傳授といふ。又肖柏より更に奈良の饅頭屋林宗二に傳へたるあり。これ所謂奈良傳授なり。宗祇はかく二三の人に傳へたれど、其の全部を傳へたるは三條西實隆より細川幽齋に及ぼせる傳統にして之を二條家歌道の正統とせり。されば、文祿慶長の頃の歌道の正統は實に細川幽齋の身に傳はれりと信ぜられしものなり。而して幽齋又連歌道の達人たりしことは、かの大原野にて催せる十花千句などにて知るべきなり。かくて慶長五年石田德川の爭起るや幽齋は丹後田邊城に在りて石田方の包圍を受け、事態容易ならざるに及びて、門人たる桂宮智仁親王は歌道の絕えなむことをおそれて媾和をすすめられしが、武士道の上より之を辭したれど、古今傳授の亡びむことを憂へて之を宮中に獻じたりしが、天皇はなほも歌道の正統を傳へたる幽齋の戰歿せむことを嘆かせられて、勅使を下して開城をすすめられたるは古より名高き事實なり。この一事を見ても古今傳授の當時に重んぜられしことを見るべきが、それと同時にその道を傳へたりし宗祇が在世の當時歌道の權威として重んぜられし程度を推測しうべきなり。さてかく連歌師がさる優良なる社會的地位を占むるを得るに至りし所以は如何と考ふるに、これ一は連歌その者の勢力の大なりしによることなるべけれど、又その連歌師たるものの實力之に與りて重きをなせりとも考へらるるなり。當時連歌師たらむとする者は二十年間の修養を要すと傳へられたることなるが、その修養は連歌の骨法を得るを主としたるものなるべしといへども、また和漢の故事に通じ、古今の文藝に精しかるべきを要したりしかば、その修養は尋常一樣の苦心にはあらざりしなり。かくの如くにして當時の連歌師は名と實とのいづれに於いても文藝界の首班たりしものなりとす。さてそれらの學業に苦心せしことは歷々としてその證を存す。そがうちにも特にいふべきは源氏物語の研究なり。この物語の研究は鎌倉時代より既に行はれ、後江戶時代にも盛んなりしものにして、その注釋書の名、枚擧に遑なき程なるが、そのうち最も廣く行はれ、又最も多く世を益したるは北村季吟の湖月抄にあらずや。この書の外もとより多少の書の世に行はるるものなきにあらずといへども、いづれもその及ぶ所大ならず。されば、吾人は先づここにこの季吟の恩惠の如何に偉大なるかを熟考せざるべからず。湖月抄にはもとより季吟の創見と見るべきもの稀にして、季吟は寧ろ前代の學者の研究を取捨集成せしものなり。而してそのうちに師說とあるは蓋し松永貞德の說ならむ。貞德は幽齋の門人にしてい

ふまでもなく當時の俳諧連歌の大先達なりしなり。而してその貞德の說の基づく所も亦前代よりの研究にして歷代の連歌師の研究頗る多きを見る。今室町時代の源氏の抄の著しきものを見れば、河海抄、花鳥餘情以後のものにては主として連歌師の研究になれるを見る。宗祇、兼載、肖柏、宗長、宗碩、昌休、紹巴いづれも源氏の抄に見るべきものを殘せり。その他三條西公條の細流抄、三條西實枝の明星抄、九條稙通の孟津抄、中院通勝の岷江入楚等は一面に於いてはそれら公卿の有識上の智識によれるものならむが、いづれも歌道を宗祇の門流として傳へたる人々なれば、一面に又それらの傳統によりて得たる智識に基づきてそれらの著述はなされたるものといふべし。かくの如く連歌師又は連歌の道に關係深き人々が源氏物語を研究せしことは一見奇なるが如きことなれど、然るべき由あることなり。今事實の上につきて說かむに、たとへば、百韻連歌一卷のうちに源氏物語の故事なり詞なりを少くも一所を詠み入るるは連歌道の不文律にして、しかせざらむは殺風景なりとして必ず之を詠みたりしものなれば、苟も連歌を談ずるものにして源氏物語一部に心得なきはあらざりしものなり。かくの如き現象を呈せしは連歌の初期にはもとあるべきことにはあらずして、連歌の旺盛期よりの事なるべきが、その源は寧ろ和歌にありて、和歌の道に於いて源氏物語を重んじたりし事よりうつりて、その餘波ここに及びしものなることはいふまでもなきことなるが、その源氏物語の故事又は詞を一卷に必ず一つはよまではあらずとまでなりし連歌は、源氏物語にとりては偉大なる支持者といふべきものなりとす。源氏物語はそれ自身が偉大なるものなれば、かくの如き支持者を要せずしても傳はりたらむとも論ぜられざるにあらねど、しかも、かく支持し、かく研究せるものありてます〳〵重んぜられしことは否定すべからざるところなり。

かくの如くにして室町時代を通じて源氏物語の研究は漸次に深められて、前代に比して長足の進歩をなしたることは明かなり。而して連歌者流は源氏物語のみならず、己が詩境を開拓すべき資料としてその他の歌文をも研究することを怠らざりしなり。かくの如くにして平安朝時代の文藝の研究は傳統的に連歌俳諧者流の手によりて後世に傳はれるなり。而してそれらの前代よりの研究の結果を集成して一大時期を劃し、後に恩惠を垂れたるものは北村季吟の著述なりとす。現今の歌文の研究者中季吟の偉大なる功績によりて恩惠を被らぬものは一人も無かるべき筈なり。而してその季吟の功を思ひ恩を感ずると共にその源の連歌俳諧者流に負ふ所甚だ多きを思ふべきなり。而してかくの如きは連歌が當時の學界に如何なる地位を占めたるかを語るものといふべきなり。

次に又當時の社會の人心がこの連歌に對して如何なる態度をとれるかを考ふるに、かの狂言の材料として連歌を用ゐたるもの稀ならず。しかるに、狂言は多くはその材料をば滑稽諧謔の方面に利

用し、或はその短處を諷刺し、或はその破綻を暴露するものなるに、連歌に對しては常に好意同情を以てし、連歌を材料とせるものは主として意外の好結果を得て局を結ぶものとして、一も冒瀆の態度をとれるを見ず。之によりて考へらるることは連歌の信用甚だ高く、之を以て滑稽の材料とし嘲笑の的とすることは社會の是認せざる所なりしを想はしむ。而してその信用の度の高きに到れる結果、殆ど信仰に近き程度にまで進めるを見る。たとへば、明應三年に宗祇が新撰筑波集を撰せむとするや、その完成を祈念する目的を以て百韵連歌を催しし事あり。又出陣の際に勝を祈りて連歌を催し神に奉納せし事あり。永正元年に今川氏親の爲に出陣千句を宗長の詠せしが如きはこの例なり。或は法樂の爲に神社に奉納せしものあり。この奉納連歌は古來屢行はれたる事にして近頃までも余等はこの事に關せし事なり。或は又亡者の追善供養の爲に連歌を興行せしものあり。この事も古來屢行はれし事にして、かく追善の爲の興行に、余少時列席せしこともありき。かくの如くなれば、連歌の何を目的として行はれたるかを考ふる事は往々史上の問題を解く一助となる事あるべきなり。かの天正十年五月廿四日に明智光秀が愛宕山の社頭にて興行せし連歌の如きは世に名高きものなるが、その發句に光秀が

ときは今天が下しるさつきかな

とよめるは土岐氏（明智は土岐の支族なり。）が天下を掌握すべき事を祈禱せしものといふべきなり。されば、この連歌の行はれし事を後に秀吉の聞きて、其事を執り行ひし連歌師紹巴の不都合を詰りし時紹巴はかねて秀吉の怒に觸れむをさとり、ひそかに愛宕山に登り、懷紙の一見を請ひてその「しる」といふ文字を削りて、更に「知る」とかきて、かへり、秀吉に詰られし時、己が一座せし時の發句は「天下なる」にして「知る」にあらざりし由を陳辯し、懷紙につきて實地に調査せられむことを請ひしかば、この懷紙は上に述べし如く一旦消して更に「知る」と記しありしによりて宥恕を得たりと傳ふ。光秀はかかる連歌を興行する程の人なりしが故に、勿論連歌一卷の成績が、かれの一大事の企の幸先如何を默示するものとして心を潛めて行ひしものなるべきが、されば若しその一卷成績よからずば、かの擧兵を直ちに敢行せしか否かは疑はしき事となるなり。若しかかる事起りしものとせば、わが國史の上には現に傳はれるものと異なる現象を呈せりしかも知られざるなり。然りとせば一の連歌が天下の大勢に關する點なしとはせざることあるを見るべきなり。

上に述べたる數條のうちには文藝史とは直接に交渉なき事柄も存すれど、連歌に對する當時の人心の傾向を察すべくして、かかる態度を以て迎へられたる連歌がその時代の文藝として頗る重きをおかれたるものなりしことを推測するに足ると共に、この時代の文藝史より連歌を除かば、その本

來のつとめを果しうるか如何は頗る疑はしきこととなるべきを思ふべし。然るに世の室町時代の文學史には多くはかかる地位を占むる連歌を取扱ふこと甚だ簡單にして僅かに一瞥を加へたるに過ぎざるもの少からず。この故に世の室町時代の文學史の貧弱なることは主として連歌に關することの取扱の疎略に基づくものと認めらる。なほそれより溯りて鎌倉時代に至れば、室町時代の文學史ほどに貧弱ならねど、なほ多大の研究の餘地の存するを見る。而してここにも亦その缺陷の主なるものは連歌に關することなりとす。この故に連歌の研究はこの二時代の文藝史の缺陷を補ふが爲に先づ施すべき當面の急務なりといはざるべからず。

連歌の研究は鎌倉室町二時代の文藝史の完成の爲のみに止まらず、江戸時代の文藝史の上に然るべき價値を有するものなり。現今吾人の見る多くの文學史は江戸時代の連歌には一言も及ばざるものなるのみならず、甚しきは江戸時代には連歌は亡びて存せざるかの如くにせるもの少からず。連歌はもとより江戸時代に盛んなりしものにあらねど、なほ幕府には連歌師の職ありて公式に行はれ、諸藩にも亦公式に行はれしものあり。民間にても全く亡びしにはあらざりしなり。然れども、これらは勢力既に衰へたるものなれば、他の文藝界に刺戟を與ふる事少きを以て連歌史自體の研究に讓りて一般の文藝界の歷史を論ずるに除外するを默認せむ。しかも默すべからざるは江戸時代文藝の一大勢力たりし俳諧との關係なり。俳諧はもとより俳諧の連歌にして純正の連歌とは別のものなれども、その系統を論ずれば、これ連歌の一支流たることは明々白々の事實なり。俳諧の連歌は山崎宗鑑、荒木田守武等によりて創められたるものと稱へらるれど、そのこれを生ずるに至れる事情を考ふれば、これ古の無心宗の連歌と一脈の氣相通ずるものあるを思ふ。按ずるに承久の前に有心宗無心宗の二派の連歌相對立せしが、承久以後その有心宗の連歌漸くに勢を得て無心宗の連歌は殆ど亡びたりと見えたるが、人心の要求は有心宗系統の優雅典麗なるもののみに止まりて滿足すべくもあらず、ここに滑稽諧謔と奔放とを旨とする俳諧の連歌が分化對立するに至れりしものにして、その分化對立の狀態はかの有心宗無心宗の分立の當時と反對にあらはれたるものなりと見らる。かれは滑稽を主とする連歌よりして優美を主とする連歌を分化對立せしめしものにして、これは優美を主とする連歌よりして滑稽を主とする連歌を分化對立せしめしものなり。その分出の順序は正反對なれど、その結果に至りては略相似たり。而してかくの如きは、これ人心の要求の自然によるものなりと考ふるときは連歌の史的研究はもはや閑人の閑事業と目すべきにあらざるなり。かくて宗鑑よりして貞德に及び、宗因にうつりて轉々する所あり、その各自特色を有しつることは論なき事ながら、しかも俳諧の連歌たることは失はざりしなり。それらはたとひ、その趣味に於いては低級な

るもの存せしとはいへ、俳諧といふ名に相應する點は存したりしなり。然るに芭蕉が所謂正風を起せるに至りては俳諧の名は存するもののその趣味は滑稽諧謔にあらずして、寧ろ純正の連歌の如く、又古の有心宗の連歌の如き態度をとれるものとなれりと見ゆ。もとより芭蕉の開拓せし境地はその閲歷と個性とより導かれたる獨特の境地にして、古來のいづれの歌人連歌師も未だ味ふこと能はざる境地なるべしとはいへ、そが所謂有心宗の系統に屬して、無心宗の系統に屬するものにあらざるは明かなり。芭蕉の正風をば俳諧の名にとらはれて、滑稽趣味と說かむとし、その正風の眞摯なる態度卽ち俳諧なりと論ずるものの如きは徒らに言辭を弄するに止まりて、吾人の如何にしても贊同しうべき事にあらず。かくの如くにして大觀すれば、かの宗鑑守武流の俳諧の連歌卽ち無心宗系統の連歌よりして再び、有心宗の系統の連歌を分化對立せしめしもの卽ち芭蕉當時の檀林と正風との關係にあらずや。かくて連歌の歷史は有心無心の起伏と分化對立の歷史なりといひても不可なき態度を示せり。もとより歷史はくりかへすが如き形をとりつつも、實は進展するものたることは必ずしもヘーゲルの辨證法を待つまでもなく明かなることなるが、余は正風の出現に於いてことにこの感を深くするものなり。この故に大局より論ずれば、宗祇以來の連歌は形の上よりいへば紹巴昌叱等によりて至高の發達をなしたりといふべきが、詩想の上よりいへば、芭蕉によりて一新面目を發揮せられたりともいふべきなり。されども、今余は芭蕉を論ぜむとするにあらず、ただ江戸時代の俳諧を目して連歌と緣なきが如くに思惟するの非なるを一言するに止めおくべきが、俳諧を眞に研究せむとするものは連歌に溯らざるべからざるは論を待たざる所なりとす。

以上の如くなれば連歌はわが文藝史上必ず載せらるべき必要の部門にして、その連歌の研究は日本文藝史を完成する爲には必ず行はざるべからざるものなり。然るにこれが研究の遲々として行はれざること彼れの如くなるは如何。惟ふにかくの如くなれるは種々の原因あるべきことなるが、その主なるものは大略次の如くなるべきか。先づ連歌は江戸時代の末には既に衰微の域に入りて之を知り之を學ぶもの多からざりしこと、これをその首とすべし。次には明治維新の當時盛んに行はれし舊物破壞の思想と、實利主義との爲に、さらぬだに衰へたりし連歌が、その破壞思想の爲に一たまりもなく地に委せられ、實利主義よりいへば、何の利益もなき無用の長物として之を顧みるものなくなりしこと、これを第二の因とすべし。次にはその後漸く自國の文化を回顧し、その文藝の歷史的の研究又は純理的研究の行はるるに及びたれど、その研究は元來西洋に文學といふものあり、文學史といふ研究あるに倣ひての事柄なりしが故に、それら識者の文學研究はた文學史的研究の唯一の模範とする西洋文學はた西洋の文學史にはこれに類似の事實なく、わが連歌の如きものは西洋

人の夢想だにせざりしものなれば、それら西洋文學崇拜者流の全然理解し得ざりしものなれば、西洋流の研究法にのみ據れる限りは永久に之を理會し得べき筈なければなり。これを現時までの流弊の最も大なる點なりとす。次には俳諧も亦西洋に類例なきものなれど、幸に子規などいふ偉人出でて新に研究法の模範を創め示したれば、明治時代の新研究は目ざましきまでの現象を呈したりしかど、その巨星たる子規をはじめとし、發句にのみ勢力を集注し、連歌の趣味は全く無視して之を度外に置きたりしを以て俳諧といへば、發句のみの事と思はれ、俳諧の連歌の如きは文學として見るべきものにあらざる如き態度を示せり。これはなほ上にいへる西洋流の研究法にのみ惑はされたるものにして子規の如き人にして尙且この觀をなせり。その以下の輩知るべきなり。上の二條は現時の流弊を馴致するに至れる最大の原因なりとす。然れども近時漸く反省の域に入り、一方にては西洋の文藝趣味以外に日本の特色ある文藝趣味の存すべきをさとり、他方にては俳諧の研究は發句のみに止まるべきにあらずして、その連歌にも及ぶべきものとして、之が研究も亦興り、かくて次第に連歌にも及ぼさむと欲する人なきにあらざる事となれるが、その目標となるべき連歌は今や殆ど全く滅びて之を知らむと欲する人ありとも、之を傳へ聞くことは容易にあらざるに至れり。この連歌の容易に知り難き事は上にいへる原因の最後の一にかぞへつべし。以上の如くなれば、連歌の研究が、わが文藝史上の缺陷として殘されたる事の由も一わたりは了解せらるべきが、かくの如きは主として明治維新以後の舊物破壞の思想と西洋の文物を崇拜する思想とによりて導かれたる事相として歎きても餘りある事柄なれど、今はた徒らに嘆きて居るべき時にあらず、須らく奮つてこの缺陷を補ふことをつとむべきなり。

日本文藝史の上に於ける連歌の研究の必要は大略上の如し。次には日本文藝の一端としての研究につきての要點を略說せむ。先づ純正の連歌と俳諧の連歌とを比較するに二者の間には共通の事柄頗る多し。その長句短句を交互に連ぬること、その發句に於ける種々の約束、その付句のうつり方、又月花の座などいふことは二者の間に多少寬嚴の程度を異にするものありといへども、共通の約束を有することは明らかなりとす。ことにかの發句と稱せらるる十七字形の詩は俳諧特有のものの如く目せらるれども、そは連歌に於いて既に行はれたることにして、しかも十七字の獨立の詩形の成立は實に連歌によりて樹立せしめられし所のものなり。この故にその一句獨立の形と意とを要求せる諸點卽ち十七字詩の特立は俳諧によりて興りしものにあらずして、連歌に於いて要求せられしものなるを忘るべからず。されば、發句に於いての連歌と俳諧との差違は主としてその詩想詩眼の如何に存するものにして、同一部類に屬する文藝たることは些の疑を容るべきにあらざるなり。

此の發句につきて想起せらるるはその季の問題なり。發句に季の存すべきことは俳諧には既定の事柄として認めらるるものなるが、かつて二十餘年の昔亡友横川健次氏ありて、熱誠なる宗教家として一時世に名あり、又外國語特に獨逸語に精通し、世には知られざりしかど、美學に精しき人なりしが、俳諧を好み、よく俳諧の美を談じ、之を美學の上より說明せること屢にして、言往々吾人の意想外に出で頗る傾聽するに堪へたるものありき。ある時同氏例の美學論より出でて發句に季の存する理由を說きたりしが、余はそれをそのまま受け容るること能はず、徐に反問して、その季の存する以上、之を美學上より說かむとするには異論はいふまじ。されど、發句に季の存するに至りし事は歷史的の事實にして、さる美學論より案出せしものにあらずといひて、連歌の發句及び季の事につきて概略を說きしかば、同氏は爾來發句の季の美學的の起源論のみは說かずなりぬ。余は今亡友の非を摘發する爲にこの言をなすにあらず。ただその事の眞相を究めずして漫然西洋風の理說を以て論じ去るべきものにあらざるの一例をあげたるに止まる。横川君の如きは余が永久に忘るべからざる益友として二十餘年後の今日まで腦裡に深き印象を止むる人なり。豈にかかる人の名を傷けむとは思はむや。俳諧の眞相の明かにならむことは氏も亦冀ひて止まざる所なるべきなり。惟ふにこの發句には必ずその詠ずる時の季節をあらはすべき約束、又連歌俳諧の上に於ける季節に關する句數の約束又月花などの約束の生ぜしことはこれはもとより大なる問題なるべしといへども、その約束の存する以上、連歌俳諧の道に携はるものの必ず季節及びその景物につきて精緻なる研究と活潑なる洞察とを加へざるべからざるに至りしことはいふをまたざるべし。惟ふに日本人が、自然に對して同情を注ぎ又深き洞察をなすに至れることはもとより日本といふ土地の環境と日本人固有の性情とに基づきて起れることにして連歌俳諧に季節を重んずるに至れるものも亦その性情より導かれしことならむか。しかも、その連歌俳諧の行はれしが爲に、その研究と洞察とが愈精しく、愈深くなりしものなるべきは疑ふべからざるなり。而して今例を近代の文藝にとれば、この自然現象に對する俳諧の態度が他の文藝に對してある意味に於いての基調をなしたりしことの往々存するは疑ふべからざる所なるが、その俳諧の自然現象に對する態度は又連歌に於ける一般事物の觀察に關する態度に基づくといはるべく、更に溯りて之を廣義にとれば、連歌のその態度は一般にいふ和歌の自然觀察の方法に基づきて起れりといふべきに似たり。然れども和歌の自然現象に對する態度と連歌の自然現象に對する態度とは頗る趣を異にするものあり。連歌にありては季節又はその景物につきてはただありのままを詠じ、又之をありのままに捉ふるに止まらずして、なほ深くその本質に切り込まむとせり。これは連歌にては季節又は景物はた又人事に對してはその本意をさとれといふ

教あるをさせるものなるが、その一二の例をいはば、「春」といへば、その本意はもの靜かに心のどやかにのびらかなる點にありと心得、たとひ、大風吹き又は大雨降るといふとも、春たる以上はその風も雨も物しづかなる本意を失はぬやうにするをいふ。又「夏の夜」といへば、短きことを本意とする如く、すべてその季節その景物等の本性如何といふことを見極めて、それを基として句をつくるべしと敎へ、又句を味ふにもこの心得を以てすべきを敎へたり。この敎はもとより初期の連歌にはあらはれぬ事にして宗祇以後紹巴の頃に至りて著しくなれるものなりとす。この季節景物人事の本質にきり込み、その本性を捉ふることは和歌に於いて行はるること必ずしもなしとせざれども、それらは若しありとせば、その作者の手腕若くは人格によりて行はるることに止まり、一般に和歌の道の敎としては立てられたるものにあらず。然るに連歌に於いては、その道を學ばむものは、その要諦として必ずこの心得なからざるべからずして、之によりて句も作られ、之により句も味ふべきなり。この點を見れば、和歌の道と連歌の道とはその自然現象及び人事に對する態度は實質的に頗る差異ありといはざるべからず。然るにこの事を知らずして和歌と連歌とを長短連續の差違以外に差異を認めず、趣味に於いても同一樣のものとするはこれ全く連歌を知らざる徒の空言にすぎず。俳諧の自然現象に對する態度は和歌のそれよりも連歌に近きものなるが、そは連歌の態度の上に更に內容上の變化を起したる結果なりといふを得べきものなりとす。この故に連歌の研究に於ける要點の一として、この事は先づ研究せらるべきものなりと思惟す。

連歌は毎句その特色あるを望むべきはもとよりなれど、その目的とする所は一句の上に止まらずして二句の付合と、一卷の美とにあり。一句のよかるべきは今論せず。連歌及び俳諧は人も知る如く二句の付合によりて順次に推し移り行くにあり。而して三句のうつりはなるべく離るるをよしとせり。この故に百韻五十韻又は歌仙等の一卷の上に一貫したる意味を求むるときは全く之をうべきにあらざるなり。卽ち、これを以て普通の意味にての一篇の詩としては認めらるべくもあらぬものなり。かくの如きは支那にも西洋にもなき處にしてかくの如きものは果して詩なりや文藝なりやは外國の詩學文學の上より見ればもとより疑はしきことなるべし。然るにわが國に於いては鎌倉時代の初期より江戸時代の終までかくの如きものの盛んに行はれたることここに聯綿七百年なり。これただ一笑に附し去らむとするにはあまりに大なる事實にあらずや。加之この連歌はもと支那の聯句に摸して按出せられたるやうにも見ゆるものなるに、支那の聯句は人も知る如く、數人の句相集りて一篇の首尾完結せる思想を有する詩をなすものなれば、その數人の漸次に句を聯ぬる手段は似たれど、その結果は似もつかぬものなりとす。この故に支那の聯句はわが連歌を誘發する動機とはな

りしかど、わが連歌の模範にはあらず。かくの如くにして連歌は實に世界に比なき一種特異の文藝といふべきなり。然らば、前後二句連續の外に意味の連絡なきものが、如何にして一篇の連歌又は俳諧としての統一體たることを得たるか。これ實に連歌俳諧に通じて存する日本文藝史の上に殘されたる一大問題たるにあらずや。而してこの大問題は、果してかの俳諧研究者によりて解決せられたりや。はたかの日本文學史研究家によりて解決せられたりや。吾人寡聞にして未だ之を知らざるを遺憾とす。

惟ふに、連歌俳諧の一卷の美は形式上の調和と變化とによりて求めらるべきものにして、その美は一種音樂的のものとたとふべきか。抑も連歌は先にもいへる如く、一句の特色にはじまり、二句の付合によりて調和を保ち、三句のうつりによりてはじめてその特色を發揮する端をなすものにして、三句のうつりは實に調和の上に變化を起すべき原因となり、かくして前後二句は調和しつつも、前の句とは離るるやうに構へつつ進むべきものにして、期するところは一卷の連歌に於ける變化と調和となり。付合の上には調和あり、三句のうつりには變化を求め、一卷の上には變化のうちに波瀾と大なる調和とを求むるものなり。されば連歌一卷は之を思想の實質よりいへば、一貫せる詩とはいふを得べきものにはあらねど、その進むにつれて變化を起し、曲折波瀾ありて、讀者をして或は喜或は憂或は哀或は樂、人事あり、風景あり、山あり、水あり、人あり、草木あり、鳥獸蟲魚あり、風雨雷電あり、或は興奮燃ゆる如きあり、或は冷靜水の如きありて、端倪すべからざる點に妙を感ずることは恰も旅行に似たり、はたまた人生の浮沈定めなきにも似たり。かくの如き現象は既に作られたる一篇の連歌に於いて味はるべき所なるが、更に之を數人の相集りて催す連歌の興行に於いては最もよく體認せらるべきものにして、連歌の眞味は實に自ら作者として、その席に列することによりて存し、その他人の作を味ふ爲にもこの體認を有するによりてはじめて同情も生じ、巧拙も眞に味はるべきなり。然れども今に在りて、批評家に連歌の實習を強ふべきにもあらねば、ここにその成れる連歌につきての見方を說かむに、一卷の連歌は之を視覺的にいはば、織りなされたる繪卷物にたとへつべく、之を聽覺的にいはば、一篇の音樂にもたとへつべきものなりとす。而してその美は先にもいへる如く句句の調和と變化とに基し、一卷の上に波瀾曲折とその全體の調和とに存するものなるが、一卷の次第を音樂的に說かば、その初表八句は序ともいふべく、初裏より二三の折は破にあたり、名殘の折は急ともいひつべく、かくて名殘の裏は初表に相應してなだらかに收むべしとすること、東洋音樂の一般の形式に似通へる點あるを認むべし。これ一貫の詩想なくして、しかも一篇の文藝として成立しその生命を永く保ち來れる所以なるべし。然れども、余は今そ

の詳細を論ずべきにあらねば、論はここに止むべきが、とにもかくにもかくの如くにして世界に類なき連歌といふ文藝は生じたるなり。而してこれは支那の聯句に誘發せられたるに止まりて、彼を摸せるにあらざるは既に述べたる所なるが、かくてわが連歌が漸く發展するに及びては、我國に傳はれる支那風の聯句はかへりて之が影響をうけて漢語を連ね漢文を綴りてつくれる連歌の如きものとなりぬ。かの五山の詩僧の聯句はみなこの式なり。この故にわが國人間に特に發達せし聯句といふものはかの韓退之等が行ひし聯句の作法に倣ひて句を聯ぬることはするもののその句毎の聯絡は連歌に同じく、その一篇の上に一貫の詩想なき點も亦連歌と同じ。今若し、これらの聯句を以て韓退之等に示したらば、その了會し難きに一驚を喫するならむ。されば、かくの如き形を有する連歌俳諧はその趣味性の是非優劣は別問題として日本人の創造にして日本獨特のものたることは爭ふべからざるなり。而してかかる特色が既に連歌俳諧によりて七百年間も行はれたる事情を顧みるときはこの特色はこの連歌俳諧にのみ存する現象とも思はれざるものにして必ずや他の種の文藝にも類似の現象の存すべきを思ふ。たとへば、かの西鶴の文章の如きは俳諧の付合に通へる心持なきか。西鶴の文章は少くも他の文とは趣を異にするものあり。余はこれ俳諧連歌の肌合をその文にうつしたるものならむと考ふるものなり。又わが文章の一特色たるかけ詞の如きは、一方は國語の音と語脉との關係より起れる現象なるべきが、他方にはこの連歌の趣味と共通する點あるを思ふものなり。かく考へ來れば、連歌のみが、奇妙なる推移法をとれるものにあらざるを考へしめらるるなり。なほ進みていはば、この趣味は文藝以外の藝術にもあらはるべきものにあらずや。余はかへりて之を逆に文藝以外の藝術の形式的の美が文藝にとり入れられたるものが連歌の形式を規定せしにあらざるかとまで疑ふものなり。いづれにしてもこの形式的の美の方面はわが連歌俳諧の特色として深き研究を要求すべき點なりとす。

次には連歌の式目及び去嫌等の約束の研究なり。抑も連歌はそれらの約束の極めて嚴密なるものなり。これは一面連歌をして後世に行はれざるに至らしめし一の大なる原因なりと認めらる。然れどもその約束の如きは漫に嚴格ならしめむとせしにはあらずして一卷の連歌をして美化せしめむが爲に累代の作者が苦心研究の結果ここに至りしものなり。惟ふにかくの如きは形式上の拘束にして連歌の道をして入り易からざらしめ、又その道の發展を阻みたる點なきにあらざるべしといへども、一卷の首尾をして多趣ならしめ、一卷の變化をして多樣ならしめ、平板無趣味に終らざらしめむが爲には效果ありしことは疑ふべからず。初學の人にてもこの法則をよくまもりて句を連ぬる時はその成れる一卷は稍見るに足るべく、老熟の人はその意のままにして、おのづからこの法則に適せむ

ものと思はる。さてもかかる拘束は先にもいへる如き句毎の調和と變化とを導き、一卷の上の波瀾曲折とその全體の調和とによりて生ずる形式美をば初學の人にても織り出しうべく定めたるものなりとす。さればそれらの式法は繁雜なりといへども、その間におのづから修辭上の法則を示せるもの少からざるを覺ゆ。將來本邦獨特の修辭學を樹立せむとする人は必ずこの連歌の式目と作法とを度外に置くことなかるべく、よくその式目と作法との精神を體し、その間に流るる一貫の條理を求めて以て大成せば、ここにはじめて國文に於ける眞正の修辭學を得べし。今の修辭學の如き、もとよりその價値少からずといへども、その大體は西洋の修辭學にして、ただ少しく例を本邦にとりしにすぎざるもの多し。連歌の式目と作法との研究はこれらの方面の研究には大なる價値を有するものにしてその眞價は寧ろこの點に存すべく、將來連歌は再び興ることなしとすとも、その式法の研究は必ずわが文藝界に貢獻する期あるべきを信ずるなり。

連歌その者の文藝としての研究の必要なることは上述の如くなるが、連歌の研究は國語學の上にも多少の關係なきにあらず。連歌の作法の上に歷代の連歌師又はその道の學者が國語の取扱方につきて下したる見解又は考察等のうちには國語學の萌芽と目すべきものありてその道に於いては之を閑却しうべきものにあらず。卽ちそれらの說明、それらの術語等が後世の國語學に影響を與へたるものなきにあらざるなり。たとへばかの體言用言の區別の如きは連歌にて論ずる詞の體用とは全く同じきものにはあらずといへども、その胚胎する所はまさしくここにあるべきなり。又かの文祿の頃、西洋人の本邦に在りて著しし日本文典の如きはその用例として、多く連歌を引けるを見る。これ當時連歌の盛んに用ゐられたりしによるものなりとす。その他連歌より出でて諺となれるもの、たとへば、筑波集の

難波の蘆は伊勢の濱荻

又犬筑波集の

盗人をとらへて見れば我が子なり

の如きいづれも連歌の付句たるなり。かくの如きは事實は或は古より人口に膾炙せしことなるべく、又何人もいひ出しうべき事なるべけれども、その句の形となりしは、救濟宗鑑の力たるなり。或は亦連歌の用語にして世俗の語と化したるあり。「さしあひ」「さりきらひ」「あげく」の如きこれなり。かくの如くにして連歌俳諧よりして世俗に及ぼしたる影響また少からざるを見る。かくの如きはもとより連歌研究の正系とはいふべからねど、かかる方面にも連歌の影響せる一端を見る。凡そかくの如き點にまで立ち入りて論ぜば、その事多々存すべきなるが、あまりに岐略に入るの嫌あれば、

ここに筆をさしおくべし。

以上吾人の論旨の大略を了へたり。然るにそれら種々の點より研究を施さむとするにあたりて、まづ問題となるべきは連歌その者の研究なり。連歌には古よりその道に入れるものにあらでは理會しかぬる特殊の事柄少からざるを以て、一往その事柄を學びたるものにあらずば、その術語の意味だに辨へ得ざるべきなり。これを知らずして論を進めむか、如何なる高論卓說を吐きたりとて、それは所謂机上の空論たるに止まり、偶、その論旨の取るべきものありとすともそはただ偶中といふべきのみ。事實堂々たる文學史にして連歌集の組織をだに辨へず重大なる錯誤を示してしかも連歌の趣味を論せるものあり。吾人より見れば、これ羅馬字をも辨へずして、英佛の文學を論ずるにも似たる事柄にしてその無謀と大膽とに驚かずんばあらず。この故に連歌を論せむとせむものは、そのはじめにあたり、一往は連歌の作法を心得、又連歌の味ひ方を知らざるべからず。連歌を論ずるものが、その如何にして作られ、如何なる點を古來重んじたりしかをも知らずしては、その論空言に止まるべきことはいふまでもなし。更に又その連歌といふものの史的發展の跡をさぐりてその種々の事柄の由りて來る所を考ふべきなり。これも亦眞相を知らずしては空論をなす弊に陷り易きものなればなり。ここに於いて連歌の研究は上に述べ來りしが如き諸點に觸れむとする前の過程として、その一卷の法式作法の研究とその發展の歷史の研究とよりはじまらざるべからず。この門より入らずして連歌を論ずるものは木に緣りて魚を求むる程の甚しきことはなしとすとも正鵠を得がたきは論なし。

ここに於いてさらば連歌の式目作法の書を研究するよりはじめば可ならむの論出でむ。その事もとより可なり。然れどもそれらの式目作法は一往の心得ありて後よみてこそ理會しうべけれ。全く連歌を知らぬ人が、直ちに理會しうべきものにあらず。これ古來の連歌の書少からぬにも拘らず、明治以後正鵠を得たる論說の出でざりし根本の理由なり。上にいへる諸の書は皆一往の心得ある人の爲に著したるものにして全くの門外漢を導く入門の階梯たるものにはあらず。古、連歌の行はれし頃は、人々その家庭又は交友の間に不知不識にその入門の課程を了へたりしなり。この入門の階梯となるべき智識なくして今世に殘れる連歌の書を了解せむとするは、算用數字又加減乘除の記號を學ぶことなくして高尙なる數學書を繙くにも似たり。今の世の連歌研究者に最も必要なるは、この入門階梯の書なりとす。余幼より家庭にありてこの道を見聞し、不肖にして父の道を繼ぐことを得ずといへども、まさに絕えなむとする慘狀を坐視するに忍びず、又世の識者として許さるる人の妄說を吐くを默視する能はずして、不敏を顧みず、連歌の爲に言を費すこと上の如し。若し時を得

ば、その入門階梯たらむものを世に公にせむことを期す。かくの如くにして連歌の眞相の世に認めらるるに至らむこと、これ道の爲にはた又亡父の遺託を果す爲に中心より希ひ望む所なり。

（昭和二年四月六日稿、同五月雜誌思想六七號掲載のものを一二訂正す）

水無瀨三吟百韻

長享二年正月廿二日

賦何人連歌

句	作者	（備考）									
雪ながら山もとかすむ夕かな	宗祇	（春）	（山）						（降）		
行水遠く梅にほふ里	肖柏	（春）		（水）	（居）					（木）	
河風に一むら柳春見えて	宗長	（春）		（水）						（木）	
舟さすおともしるきあけかた	祇		（夜）	（水）							
月やなをきり渡る夜に殘るらん	柏	（秋）	（夜）						（聳）		
霜おく野はら秋は暮けり	長	（秋）							（降）		
鳴むしの心ともなく草かれて	祇	（秋）								（草）	（蟲）
かきねをとへはあらはなる道	柏				（居）						

水無瀬三吟百韻

やまふかき里や嵐にをくるらん　長
なれぬすまゐそ寂しさもうき　柏
今さらに獨有身を思ふなよ　祇
うつろはんとはかねてしらすや　長
おき佗る露こそ花に哀れなれ　柏
また殘る日の打かすむ影　祇
暮ぬとやなきつゝ鳥の歸るらん　長
み山を行はわくそらもなし　柏
はるゝまも袖は時雨の旅衣　祇
わか艸まくら月ややつさん　長
徒にあかす夜おほく秋ふけて　柏
夢にうらむる荻のうは風　祇
みしはみな故郷人のあともなし　長
老のゆくへよなにゝかゝらむ　柏

長　春　山　居　居
柏　春　春　春
祇　山
長　冬　旅
柏　秋　旅
祇　秋　夜　旅
長　秋　夜
柏　秋
祇　述　無　述　述
長　述
柏　戀　戀
祇　降　降
長　植
柏　草
祇　鳥　人

色もなきことの葉をたに哀しれ　柏
それもともなる夕くれのそら　長
雲にけふ花ちりはつるみねこえて　祇
きけは今はの春のかりかね　柏
おほろけの月かは人もまてしはし　長
かりねの露の秋のあけほの　祇
末野なる里ははるかに霧立て　柏
吹くる風はころもうつこる　長
さゆる日も身はそてうすき暮毎に　祇
たのむもはかな爪木とる山　柏
さりともの此世の道はつき果て　長
こゝろほそしやいつちゆかまし　祇
命のみ待ことにするきぬ〳〵に　柏
猶何なれや人の戀しき　長

春　春　春　山　夜
祇　述　述　述　述
柏　戀　戀
長　降　降
祇　人　人　鳥

君をおきてあかすも誰を思ふらん　長
その面影に似たるたになし　柏
草木さへふるき都のうらみにて　祇
身のうきやとも名殘こそあれ　長
たらちねの遠からぬ跡になくさめよ　柏
月日のすゑや夢にめくらん　祇
この岸を唐舟のかきりにて　長
又生れ來ぬ法を聞かはや　柏
あふまてと思の露のきえかへり　祇
身をあき風も人たのめなり　長
松むしのなく音かひなき蓬生に　柏
しめゆふ山は月のみそすむ　祇
鐘に我たゝあらましのね覺して　長
いたゝきけりな夜な〳〵の霜　柏

冬		秋	秋	秋	秋							
夜	夜	夜	山									
						水						
									居			
						旅						
述	述				釋			述	述	述		
			戀	戀							戀	戀
降				降								
		草								植		
		蟲	人					人	人			人

ふゆかれの芦零侘て立る江に　祇
夕しほかせを沖つ舟人　柏
ゆくゑなき霞やいつく果ならん　長
くるかた見えぬ山里の春　祇
茂みよりたえ〳〵殘る花おちて　祇
木のもと分るみちの露けさ　柏
秋はなともらぬ岩屋もしくるらん　長
苔の袂も月はふけけり　祇
心あるかきりそしるき世捨人　柏
おさまるなみに舟いつるみゆ　祇
朝なきの空にあとなき夜の雲　長
ゆきにさやけき四方の遠やま　柏
嶺のいほ木のはの後も住あかて　祇
さひしさそふる松風の聲　長

	冬				秋	秋	秋	春	春	春		冬
	山	山			夜				山			
			水								水	水
	居								居			
			旅									
				釋	釋							
		降	聳							聳		
木	木						木					
				人							人	鳥

誰かこの曉おきをかさねまし　長
月はしるやの旅そかなしき　祇
露ふかみ霜さへしほる秋の袖　柏
うすはなすゝきちらまくもをし　長
鶉なくかた山くれて寒き日に　祇
野となる里もわひつゝそすむ　柏
歸りこは待し思ひを人やみん　長
うときも誰か心なるへき　祇
昔よりたゝあやにくの戀のみち　柏
忘られかたき世さへうらめし　長
山かつになと春秋のしらるらん　祇
うへぬ草葉のしけき柴の戸　柏
かたはらに垣ほのあら田かへしすて　長
行人かすむあめのくれかた　祇

春	春								秋	秋	秋	秋		
									山			夜	夜	
	居	居						居						
												旅		
								述					述	
				戀	戀	戀	戀							
降											降			
		草								草				
人			人			人	人		鳥					人

やとりせん野を鶯やいとふらん　柏
小夜もしつかにさくらさくかけ　長
灯をそむくる花にあけそめて　祇
たか手まくらに夢はみえけん　柏
ちきらはやおもひ絶つゝ年もへぬ　長
今はのよはひ山もたつねし　祇
かくす身を人はなきにもなしつらん　長
さてもうき世にかゝる玉の緒　柏
松の葉をたゝ朝夕のけふりにて　祇
うらはの里よいかにすむらん　長
秋風のあら磯枕ふしわひぬ　柏
雁なくやまの月ふくるそら　祇
小萩はら移ふつゆも明日やみん　長
あたの大野をこゝろなる人　柏

	秋	秋	秋								春	春	春	
		夜	山						山		夜	夜		
			水	水										
				居										
						述	述	述						
										戀	戀			
	降				聳									
	草				木							木		
人		鳥					人				人			鳥

(名ウ)わするなよかりにやかはる夢うつゝ　祇
おもへはいつをいにしへにせん　長
佛たちかくれては又いつる世に　柏
かれし林もはるかせそふく　祇
山はけさいく霜よにかかすむらん　長
けふりのとかにみゆるかりいほ　柏
いやしきも身をおさむるは有つゝし　祇
人におしなへ道そたゝしき　長

宗祇　三十四
肖柏　三十三
宗長　三十三

(春)(春)(春)
(山)
(居)
(述)(述)
(釋)(釋)
(降)(鋒)
(人)(人)

元龜二年二月五日於大原野勝持寺
細川藤孝興行

大原野十花千句

元龜二年二月五日於大原野細川兵部大輔興行

第一

賦何路連歌

けふこそは花咲ぬ松もをしほ山　白藤孝
霞にきえし明ほのゝ雪　三大
春の水漲きる月に雨晴て　紹巴
舟のゆくゑの袖のはるけさ　飛鳥井中將
村蘆の葉分かたよる秋の風　昌叱
夕霧の間の螢とふかけ　玄哉
絶〳〵にかゝる簾の露みえて　心前
片枝そよめく軒の吳竹　英帖
更ぬれは寒さおほゆるさよ枕　了玄
かりねの夢そむすふ程なき　宗仍
いつしかに月は入ぬる夏のそら　宗及
茂り木高き遠かたの山　宗圭
一筋の河水しろくあらはれて　白孝
けふり吹やる里の朝風　三大
あれてしも近き隣の中垣に　叱中
忍ふとするも見しかあやしき　巴
誰となき契の末を求はや　飛
すつる身さそな蓬生の奥　巴
さひしさの松のひゝきも聞馴て　哉
ゆふへの秋そうつりもて行　前
露やたゝこほれ初ての村時雨　帖
風より後の霧ふかき山

(二八)漕まよふ夜舟の月の波の上　玄
磯根をさそひ千鳥鳴たつ　仍
雁のゐる干潟や雪にさえぬらん　及
しほれて殘る冬草の色　孝
春もまた淺き方より分る野に　白
霞のうちの山風のすゑ　巴
永日も入相の鐘におとろきて　哉
かへるさしたふ柴の戸の友　叱
おなし世の頼み斗やかゝるらん　三大
數ならぬこそつらき玉の緒　前
あた人の契もよそにかたつきて　帖
あまたのそねみおふやくるしき　玄
おこたりもあらぬのみなる物の氣に　飛中
まとろみあへす夜や明ぬらし　及

(二九)歸ても旅の心をならひにて　孝
やつれしまゝのころもへにけり　白
れいならぬ後も力やよハるらん　巴
たすくる杖も老はかくれす　三大
あはれみも深き親にしつかへきて　仍
うほや氷をおとり出けん　前
萍のなかれて水はすむ月に　哉
跡まて涼し秋のむら雨　帖
露なから軒の下風吹出て　叱
たか笛ならし前渡する　飛中
問來やと待にゆふへもはかなしや　及
春も過行山ほととぎす　玄
散は咲花より花の嶺越に　巴
いくへ霞の袖の遠近　白

(三〇)うららなる高瀨の棹をさしはへて　三大
みなとになりぬおきつ鹽風　孝
見る〳〵も波間の月のうかふ夜に　前
露は早田のほのかなる色　及
さをしかの通ふ跡ある秋の霜　玄
人氣はさらにたゆる谷の戸　巴
世の外は我心こそ友ならめ　仍
くむさかつきに憂も忘るゝ　叱
ことなしに旅の行手やいはふらん　白
國の司もみたれたるはて　孝
一さとの中にも家は稀にして　巴
うへをく斗松はふりたり　哉
夜の間にや積りし今朝の雪ならん　飛中
をとはとたえもあらしこからし　帖

(三一)所々かこひもやらぬ草ふきに　及
いつまて守し田面なるらん　仍
くつれをも霧に堤の秋の水　白
あらましくふる雨は冷まし　巴
落てしも色なき陰の桐の葉に　叱
暮はてぬまは月かすか也　帖
ゆくと來としけき人目を忍ひ侘　孝
たのめ置ての門のやすらひ　前
袖にいつ秋風ふれん夏衣　巴
はらふ枕にさらぬ蚊の聲　哉
端近くうたゝねなから夜は明て　飛中
夢のうちにもみし春の花　叱
こえぬるやたゝ時の間の年ならし　三大
鶯來なく相坂の關　玄

袖にふるゆき過かてにかへりみて　哉
たか古跡のすゝきなりけん　孝
住かへん宿とおもふもうき秋に　仍
なかむるにはや月かたふきぬ　白
稀にあふ夜半の枕の哀しれ　前
きかはうらみもわかんことわり　巴
しもなるはめくみに洩る宮つかへ　帖
道のきはめを神やたゝさん　叱
つらぬるもすくなるをこそ哥ならめ　及
筆を殘してむかふ卷々　仍
色あひもきぬによりたる摺衣　孝
御狩の野への跡尋ねはや　三大
大原や小松もわかぬ草高み　叱
山の麓も水の五月雨　前

巣にふすもはなるゝ鴨の岩傳ひ　巴
くたす筏の袖あまた也　玄
爰かしこ改めぬへき殿作　仍
うつす都そ所せきなる　帖
青柳にましる立枝の花の色　前
ふかき園生の草はかうはし　飛中
胡蝶とふ日も夕露の靜にて　白
はれぬ霞やあまそゝきせる　叱

白　九
藤孝　九　英帖　八
三大　七　了玄　七
紹巴　十一　宗仍　八
飛鳥井中將昌叱　十　七　宗及　七
玄哉　七　宗圭　一
心前　九

元龜二年二月五日

第二

賦何人連歌

まつ心花やしりけん今朝の雪　飛鳥井中將
うくひすはふき出る眞木の戸　昌叱
山霞む野へを砌にかきこめて　宗及
たてるけふりや竹の一むら　三大
風渡る下水遠き川岸に　白
月に暮たる橋の凉しさ　藤孝
岩かねの雫絶々雨過て　紹巴
いくへ苦地の末つゝくらん　玄哉

かつ〳〵も落る紅葉の木の本に　宗仍
山たちならすさをしかの聲　英帖
明る夜の空もしはしは霧降て　心前
つなくまゝなる里の河舟　了玄
柴人の道はいつしか絶ぬらん　右運
おれ臥にける笹の葉の霜　飛中
陰寒き嵐の松の枝くちて　叱
やとりやいつこ烏なく聲　及
すみ染の夕へは鐘の色ならし　三大
野寺に近き袖の歸るさ　白
かきりあれは親の跡しも問捨て　孝
あへすもうつる日數かなしき　巴
長月の月の名殘もうす霧に　哉
かこふかたへの菊の朝露　仍

秋風のふき絶ぬれは蝶のねて　帖
ゆく人見えぬ小野の通路　前
炭かまの烟もさゆる夕ま暮　玄
雪になるべき雲かゝる峰　叱
こえ残す山はるかなるたひ衣　飛中
水草きよし駒休めてん　三大
朝日さす澤邊の冰とけ初て　白
また霜白き春のさよ風　孝
かしけたる竹の陰野は荊渡り　巴
奥や梅さく賤かかき内　哉
あら玉の年はいつくも知からし　及
都の四方のけしきしつけき　仍
けふやたゝ光もかはる秋の月　前
さそなわかるゝ星合のそら　白
露の間も隔つるうさを身に知て　孝
またうちとけぬ中の衣手　帖
よそにして心とるこそ悲しけれ　三大
書まきらはす歌のことの葉　巴
ならはすもうゐ琴のをやたとるらん　叱
すむも明石の浦のあはれさ　及
聲近き曉月の島千鳥　巴
舟に目さます袖のをひ風　前
古郷をおもふもいとゝ遠さかり　玄
我身のむかししたふはかなさ　叱
ちらはかく植さらましを春の花　仍
露の色さへあたらやまふき　白
うらうへもわかぬ霞の衣にて　哉
井關にかゝるをちの川波　前

ほのかなる鵜舟の篝明渡り　孝
晴間しはしの五月雨の空　玄
うきなからさすかなくさむ一筆に　三大
きけはえさらぬさはり也けり　巴
とふ宿もいも井のいみにさし籠り　仍
雲の林に近き神山　帖
杉村に嶺の櫻のかた分て　前
またれぬ春も鳴ほととぎす　叱
月はまた有明ほそく霞む夜に　飛中
名殘たえせぬ夢のうき橋　巴
ひとりねの泪や床の海ならん　白
人をみるめのあらぬかなしさ　仍
名をきくにその面影の年ふりて　哉
あふをはしめのゆかりはつかし　及
跡先もおなし所のさすらへに　孝
よせくる舟のちかきうら波　飛中
はなれそに殘りし松も根を絶て　巴
しほ木こりつむ里の家々　三大
住なすもあたりはせはき苫ふきに　玄
道はかたへの岩のはさま田　白
暮るまて朝けの霜の消やらて　帖
袖になれたる野風山風　仍
旅なるをおもふこそたゝ心なれ　及
かたみにたのむよることの夢　哉
うきは猶敷佗にたるさ莚に　前
枕さへおし春秋の花　巴
明はつる月の行ゑの天津鴈　白
霧にはれたる波のはるけさ　叱

(名)それかとも時雨し跡の山の色　三大
ひかりは落て虹の一すち　孝
いかりある眼のうちはおほつかな　巴
たかいひさけてかこちくる人　及
かけをきしちかひの末はかはらしな　玄
おなしはちすに生れ出なん　前
聞うるも聞えぬとても法の場　叱
とのゐの聲はねぬるまに〳〵　帖
ふけぬれば影かすかなる灯に　白
わかまたぬ夜も月はそむかし　三大
蜑衣暮行波にうちそへて　孝
ひたひく音は遠きみなと田　哉
中に籠る芦の丸屋は里はなれ　前
ひとりさひしくたつ鳴渡る　飛中

(名)入にしも出る山人いかなれや　三大
心淺きはすつる世もいさ　帖
あふ事にかへん命といひ〳〵て　巴
うらみのあまりかゝる物のけ　仍
せきあくる胸のおもひの折々に　叱
泪もろなる袖のあやなさ　哉
伴ふもあはれ老木の花の陰　玄
みとりかくるゝ松の藤波　孝

飛鳥井中將　六　玄哉　八
昌叱　九　宗仍　八
宗及　七　英帖　七
三大　九句　心前　九
白　九句　了玄　七
藤孝　九　右運　一
紹巴　十一

元龜二年仲春五日

第三

賦何衣連歌

月花にわするはかりのうきも哉　紹巴
ちれは櫻の下ふしの山　玄哉
長閑なる嵐もこすに吹入て　宗仍
いつくの空に時雨ゆくらん　藤孝
うかへるも跡なき雲の波の上　昌叱
いや遠さかる沖の釣舟　三大
みるか内に幾つら過る雁の聲　飛中
かりねの夢もやゝ寒き袖　白
(ウ)をけはたゝ月にまかへる秋の霜　宗及
野人はいつこも草かれの色　心前
住かけもあらはになれる垣ならひ　英帖
燒火にしるし山きはの里　了玄
よせかへる波の遙に暮初て　文閑
ひかたなるらし白き眞砂地　巴
したひきておりゐる友を鶴の聲　哉
松にやこもる仙人の宿　仍
爪木こる道もなき迄降雪に　孝
明はなれても風のはけしさ　叱
雲のほる谷をふもとの泊瀨山　三大
一すち遠き川水の末　飛中
作る田に筧たえ〳〵くち殘り　白
そゝく雫のふかき菅の葉　及

槇たてる木間の道の幽にて　前
夕日さひしき古寺の秋　帖
すさましき嵐につるゝ鐘の音　玄
よはひのね覺いとゝ露けし　哉
なき人をおもひ出るにかすそひて　巴
ゆかりに似は年々にのみ　孝
手習の筋をあらはす筆の跡　仍
たゝしき心ほかに見ゆらん　三大
醉るともしられぬ顔の色相に　叱
寄りくる舟は暮るあら磯　白
みつ鹽のうら吹風にはやからし　飛中
空にさはきて鳴むら千鳥　前
さらにたゝ明る影なるよはの月　帖
秋さへあつしせはき山窓　巴

竹の葉のおほふ軒端の霧降て　白
ひる間を過る朝かほの花　孝
舞姫の玉のかさしの誰彼に　巴
法の庭にやましる天人　前
池水の舟はさなから浦の波　仍
へたての山は中にはるけき　及
別ても又といもせを頼む身に　飛中
たえぬ契りやわか渡り川　叱
いく度かゆきめくるらん三の道　三大
とひよる跡はまよふ淺茅生　哉
哀たゝ枝ももき木の花の陰　前
もる人見えす霞む神垣　玄
春ならぬ聲なりけりな鳴鳥　巴
おき出ぬれは月寒き山　叱

埋火を明はつるまて伴ひて　孝
苔に音する水の淋しさ　前
古川のなかれの中の橋はしら　叱
つゝみも見えぬ五月雨の比　帖
文をたゝひらけは落る我汨　及
たえんかきりと問し夜もうし　巴
一度と口かためてもあちきなや　哉
忍ひ入にも戸さしあやしき　白
くつれたる垣ほを道の里はあれて　三大
草葉をしなみ野分せし跡　仍
蟲の音は露の底にもむすほゝれ　玄
秋ふけゝりな身にしむる袖　飛中
ならしつる扇や月にかはるらん　孝
うたひ捨つゝしつまれる聲　叱

たをやめも心淺きは何ならて　及
おもからぬもそ品をくれたる　三大
物こしの立ゐの音も暮深み　巴
ほとけのかさり知きおこなひ　白
海士人のまつかうら嶋おもひやり　叱
ほすにもあみや破れはつらん　孝
ささかにの引手にすかく糸よはみ　三大
風のまゝなる軒のはせを葉　前
むら雨の跡さりけなき月や見ん　白
雲のまかひに薄き稲妻　帖
たとへてもなにかはあらん憂契　哉
人のこゝろもうつろへる花　及
みかきなす春のおまへの折をえて　玄
祭ちかつく春日野の道　巴

(ね)いつしかに雪けの澤の淺みとり　前
風をつはさにひはりたつ空　飛中
はし鷹の袖にとはふを引するて　孝
また明ぬ夜をたとる山越　仍
やつれたる姿忍ひて入關に　巴
車もなにかたのめおく門　叱
笛の音に合する琴もあためきて　帖
哥のむしろやいひ知らぬ友　白
誰も名はきこえあけんの心かは　三大
とのゐもる夜もうつる時々　玄
みる〳〵も月はみはしにかたふきて　仍
ひはたの隙を露の古宮　巴
ひやゝかに吹こそ落れ松の風　白
瀧をむかひのふかき山あひ　孝

(ら)柴人のとり〳〵運ふ渡し舟　飛中
道は野中にとをき一むら　前
吳竹のけふりや暮をいそくらん　帖
霜うちはらひ雀鳴なり　哉
冴なから春のけしきのしるき日に　文閑
霞の衣うすき半天　叱
風誘ふ花に伊駒の雲きえて　孝
音あらましき雨晴る比　及

紹巴　十一　白
玄哉　七　宗及　七
宗仍　七　心前　九
藤孝　十　英帖　七
昌叱　十　了玄　六
三大　八　文閑　二
飛鳥井中將　七

元龜二年二月六日

第四

賦何船連歌

一木つゝ身をし分はや花の本　心前
しろきか後の紅ゐの梅　三大
鶯の霜に朝日を待とりて　藤孝
霞のいつこ有明の空　玄哉
よる方も波の夜舟の鐘の音　宗仍
秋のあらしや礒山のかけ　英帖
すさましく成て幾度時雨るらん　白
松の雫の草々の露　飛中

(ぬ)ゐる鳥の垣ほ傳ひに羽吹出て　紹巴
外面にうつる日はさやか也　了玄
吳竹の茂き末葉も冬枯に　昌叱
田つらにつゝく道のくさむら　宗及
はる〳〵と野澤の水やなかるらん　宗圭
しはし斗の夕立の山　前
うき雲は風の行手に嶺越て　三大
友まとはせる鶉なく聲　孝
鷹人のまたきに出る春の夜に　哉
はらふも雪のきえ殘る袖　仍
露にしも下崩急く園の色　帖
青柴なから折たける庵　白
風寒み月また遲き夕ま暮　飛中
けふりにこもるみなかみの山　巴

(二)一村の松の木間に瀧落て　玄
岩ふみならす道の涼しさ　叱
乘駒のいはふ行ゑやまかすらん　及
おもかはりしてあるゝ古郷　三大
生ひ添て砌のうちの草高み　前
またれし程のいかにひさしき　哉
新枕年の三とせと契置て　孝
親の名殘も住かふる跡　帖
埋れ水はらふあたりは大井川　巴
塵もあくたも風のまに〳〵　仍
をくれゆく牛のあゆみの暮る日に　叱
月に見えたる草かりの袖　白
薄霧の晴殘りぬる野を遠み　飛中
跡よりやまた秋のむら雨　巴

(二)をそくとき梢もおなし色にして　仍
やとりあらそひ雀鳴なり　前
くつれたる軒はわら屋の爰かしこ　孝
冬田の原そ行人もなき　玄
岡のへや霜置渡すゆふ嵐　白
するゑは水こす橋のたえ〳〵　三大
湊川入鹽高く成けらし　巴
袖はなみたのかはる度々　及
別るれは逢うれしさも何ならて　帖
たのまし物を夢そはかなき　叱
曉の月のいつこの郭公　前
雨に侘つつ猿のなく嶺　孝
陰おもふ山のかひある花に來て　三大
うき世は出つしつかなる春　白

(三)二月や佛の前にとなへをり　哉
あかしはたせる灯のもと　巴
見初ては返すさうしの奥床し　及
ふかき心やなを音羽川　帖
山しなの跡は草木の中にして　孝
おもはす捨し世こそつらけれ　三大
よはひたけたよりに賴む子の行ゑ　巴
やもめ住にや限るあはれさ　叱
旅なるを待よはりての物おもひ　前
文のつてさへ絶はてにけり　玄
もろこしの學ひも末に成て來て　白
やまとはことにしらへかたしや　仍
榊葉の影さへさゆるよはの霜　三大
鵙なくかたはあけほのの月　孝

(三)秋の田の近き庵は山かけて　帖
竹のわれ樋の水は冷し　右運
降音のあらき雨もや過ぬらん　及
いなひかりして暮はつる空　前
積りこし身の年々のやよいかに　巴
かたる泪はいにしへの友　哉
隱家に住つかはやも問捨て　仍
道ある山は花さける程　叱
春にこそ心をよする哥ならめ　孝
霞のひまの住吉の波　白
うなはらやうかひ出たる淡路島　前
おもふとならは朝夕に見ん　三大
秋としもかくる契りを月もしれ　玄
なみた身にしむさむしろの床　飛中

(名ウ)里はたゝ鶉なく野とあれ果て　白
いく一本のすゝきなるらん　巴
みな人の哀とそいふ萩か花　仍
何かにしきの袖にまされる　哉
唐衣ゆるすは淺き色にして　三大
さすらへてしも立歸るほと　孝
あらかりし波にも馴る蜑小船　叱
春のけしきもしるき海つら　及
ひらの根や花吹おろす風立て　玄
霞きえ行今朝のしののめ　前
入と見し月のひかりも半天に　巴
秋の螢そ窓にみたるゝ　白
板間もる露を雨夜の名殘にて　叱
竹のそよきも霧にしつけし　帖

(名ウ)あつまるやたゝとり鳥の聲ならん　及
つなてを引もさそな大舟　巴
風きほふみつの濱松波かけて　三大
花も雪ちる難波江の蘆　哉
長閑なる鐘のひゝきの暮さひし　白
ひとりの宿と人かへる春　叱
戸ほそをやとつる霞に任せまし　帖
つつくも道は谷ふかき方　仍
心前　九　紹巴　十一
三大　十　了玄　六
藤孝　九　昌叱　九
玄哉　七　宗及　七
宗仍　八　右運　一
英帖　八　宗圭　一
白　十
飛鳥井中將　四

元龜二年二月六日

第五

賦山何連歌

玉簾おろさは花のあらし哉　英帖
なかめにあかぬ月の長閑さ　了玄
明る迄幾つら雁の別るらん　昌叱
波のまかひの遠の白雲　白
雪晴て山の端うかふ和田の原　玄哉
入江をあとに出る釣舟　宗及
一村に衣うつ音と絶して　藤孝
霧の雫やもらぬ木隱れ　宗仍
(名ウ)かつ散し枝も紅葉のはを茂み　紹巴
またほのかなる月の夕風　心前
空にたくかほりを閨のしるへにて　三大
眞木の戸口の人目あやしや　飛中
吾ならて誰にかは又契るらん　文阿
ことはの末そかはりもて行　帖
祈るには物のけしきもしるかれや　玄
けふをすくして歸れ山寺　叱
問跡は哀に殘る蕣の下　白
梅なりけりな朽木花さく　哉
鶯のやとりもとむる聲はして　及
春暮ぬとや鳴ほととぎす　孝
長雨のかきりもしるき夜半の月　仍
雲行つくしまよふうす霧　巴

秋寒き山分衣出る野に　前
袖ふきすつる松風の音　三大
繫おく船は見る〳〵遠さかり　飛中
ひく鹽早くなる湊川　玄
ひとかたは梅の中迄なかれ洲に　帖
立てはやかておるゝむら鷺　孝
山こえし鷹やま近くかけるらん　巴
しはし斗の雪のなか空　白
夏迄も散殘ぬるさくら花　及
扇の色はたそかれの袖　巴
黑髪のたはつけそへしかいまみに　叱
君につかふる人もたのまん　仍
のほるへき行ゑはいかに位山　白
ふもとの道は月まちてこそ　哉

妻こひもへたつる鹿の聲々に　孝
千種の中のいつれ萩原　前
籬をもみたしはてたる野分して　宗圭
雨の名殘のにこる池水　三大
蛙なく田つら遙に植渡し　帖
一木々々に茂る青柳　白
をのかとち凉み所をしめ置て　哉
宵すくるまて語るおはしま　叱
かすかなる燈籠の光かかけそへ　前
繪にかく花もあかぬ下臥　孝
春さゆる屏風の隙間たてよせて　巴
かすみくみつつうたふ聲する　玄
入まても霞はしりの有明に　叱
窓をひらけはなひく竹の葉　仍

雲かとも外面のあふち咲出て　白
またきにくらし山ちかきかけ　巴
めくる間もいく度々の村時雨　飛中
あらしの波のいそさきの舟　叱
暮し夜も鐘にしらるゝ清見潟　前
休らひて行く玉鉾の道　孝
先立はかこちやせまし花の友　仍
折かへらはやつゝしやま吹　哉
野邊をたゝ春の程こそ家ゐなれ　巴
朝な〳〵のちとりもゝ鳥　前
糸竹に誰世の聲か殘るらん　三大
數にもいらぬ身こそつらけれ　及
見るもたゝ雲井の月はうらやまし　帖
いかにをきそふ草の戸の露　叱

谷川の波ひやゝかに岩こえて　前
秋のゆふへの螢すくなし　巴
たえ〳〵に霧の籬の立へたて　玄
市のかりやをかたはらの道　孝
捨ぬ身もたゝ心なる隱家に　叱
都の空のね覺しつけし　仍
おれぬへき草木もあらぬ雪のうち　圭
たゝ一もとの庭のなよ竹　前
しめはふる社の前は神さひて　哉
あはんあはしのゆふけとふ暮　三大
はかなきは別れし今朝の夢かたり　及
遠きむかしも心にそしる　白
月に猶あらましかはとおもひ出て　飛中
まくらもとらぬ秋の夜長さ　帖

(名ウ)おる機の音は小田かるひま〳〵に　孝
蟲すたくなり草垣のなか　巴
さゝかにのいとゝふりたるやとりにて　白
みきりになかす川水の末　及
度々のかことともいかに方たかへ　前
こゝろ見んとやうき作り文　仍
ためしなほ折るこそかたき桂なれ　巴
賀茂の祭のたえぬ年々　叱
秋津洲のはしめおもふも遠き世に　帖
こゝろ〳〵は歌にしるしも　飛中
月にもや夕あけほの分さらん　三大
常に霧ふる山のした庵　哉
露なからときあらひ衣ほし侘ぬ　孝
たひなるをまつ泪かなしも　玄

(名ウ)おなし世になくなる人はいかにせん　及
頼むこゝろもかよへはらから　巴
かりにたに根も見ぬ草の春日野に　三大
積るかうへのしら雪の比　帖
過ぬへき三冬の薪こり置て　孝
かすかにすめるかけの山賤　仍
植なせる花かと斗おくふかみ　叱
霞のうちのひはら槇原　飛中

英帖　八　紹巴　十一
了玄　六　心前　九
昌叱　十　三大　七句
白　八句　飛中　六
玄哉　七　宗圭　二
宗及　七　文阿　一
藤孝　十
宗仍　八

元龜二年二月六日

第六

賦二字返音連歌

露ならて花ふさおもきさかり哉　宗仍
谷の戸ふかし春の朝霧　紹巴
小田返す山邊は鹿の跡みえて　白
里よりをちの道の絶々　英帖
波の音も眞砂をかけて滿鹽に　藤孝
なひきあひたる霜の村芦　了玄
萩原や下葉は風も枯はてゝ　三大
蟲の聲せし月更る空　昌叱

(名ウ)端近み暑さ殘らぬ手枕に　心前
うたゝねのまや雨そゝきせん　玄哉
人め猶しつまるほとを待侘て　飛中
おもふあたりにうかれ出つゝ　宗及
笛の音も聞こそはたゝ便りなれ　右運
野路の歸(カヘ)さをつるゝ草かり　仍
おくれつる袖も急きて渡し舟　巴
夜ふかゝりしも明はなれ行　白
遠山の月に鳴たつむら鳥　帖
霧のうちなるふくろふの聲　孝
松高き陰すさましき古跡に　玄
道もとちたるむはらからたち　三大
うろくつは中のふしつけ冰して　叱
暮るまに〳〵さゆる川風　前

芦火こそはるけき里のしるへなれ　哉
まくら敷捨急く野の末　飛中
聞すへんとはかりしたふ鳥の聲　及
明はつるかの春のきぬ〳〵　巴
あふ時も心のとめぬうらみにて　仍
つれなきやたゝ猶近まさり　帖
尋ね入紅葉の後の嶺の松　前
時雨てすくる秋の山道　玄
鈴鹿川やそせも霧にかくろひて　白
月にかりほを出そわつらふ　孝
蚊の聲や風吹方にうすからん　巴
衣手涼しゝはしぬるほと　叱
森こそと立よるかけの休らひに　三大
ひろき野中の跡はむら雨　巴

四の緒はさすか絶せぬ宮ふりて　孝
けはひ床しき軒の玉たれ　白
やつすにも女車はしるかれや　玄
かはすこと葉も色このむ人　仍
守ぬるもゆるして折や花の枝　及
ところ〳〵になれる梅園　前
白妙の雪にうくひす鳴出て　巴
野へよりや先霞たつ山　熊千代
なかれあへぬ淺澤水の夕烟　三大
茂る草葉のみとりいくむら　帖
町々に早田晩田植分て　叱
いつかは秋の露みたれまし　巴
風絶て月に聲すむきり〳〵す　前
中々夢は見えぬ長き夜　孝

なをさりのうきこそ絶し枕なれ　仍
あつしさに身はきえはてねたゝ　叱
たかむくひ積りてかゝる物おもひ　飛中
生れくる世のさきをしらはや　前
傳へより外にしもある法の道　白
けふの馬場のいかにかちまけ　孝
あつさ弓たつかの程に日は暮て　三大
關をこえつつ遠く紀の山　哉
須磨の浦や舟行武庫の沖津波　巴
風あらましく吹しきる音　玄
つれなさの檜原も杉も雪おれに　叱
とはんといひし隱家の友　白
人はみな昔になれる跡かなし　帖
かたみかほにも月やとる袖　仍

契をく扇をたにと捨やらて　巴
君かこゝろの秋風そうき　哉
日にそへて色も染ます思草　前
分こそならせかやか下露　叱
武藏野やいつを限りの道ならん　仍
富士を見る〳〵かり臥の夢　飛中
こえぬるも一夜の程の年にして　白
面影や先さく花の春　帖
河上の柳のひまの波の色　叱
ちかき夕へはたゝ秋の月　巴
雨晴ていなひかりする村雲に　孝
しのひ行にも人やあやめん　三大
ねたみある局あまたの前わたり　前
問くる夜半も明過るなり　及

(名ウ)いなせをも聞わかぬ間に立別れ　帖
おもひによはる命かなしも　白
たひをしもしらぬ行ゑといひ〳〵て　哉
さしていつこか我やとにせん　三大
目もあやの袖所せき花の本　巴
櫻かりにと駒なへてけり　孝
空ははや降ほともなき春の雨　及
きのふにかはる雪の山々　前
舟はなほ嵐の波にこきはなれ　仍
かこひ捨てたる筈やさひしき　飛中
刈渡す田つらの月の影清み　玄
つはさに鳴の霜はらふ聲　叱
夕暮のうつらや床をかへつらん　孝
野となる跡に又かへりすむ　哉

(名ウ)あらたむる齋の宮の代のはしめ　三大
はらへもさそな志賀の浦波　帖
舞姫のあらそふ袖の名殘あれや　叱
雲に入日のかけはすくなし　及
冬かけて稲葉ほしおく岡こえに　仍
竹のはやしのむら鳥のなく　熊千代
むさゝひの里に落くる聲はして　孝
いやたかまとの野風はけしき　白

宗仍　九　心前　九
紹巴　十一　玄哉　六
白　九　飛中　五
英帖　八　宗及　六
藤孝　十　熊千世　二
了玄　六　右運　一
三大　八句
昌叱　十

元龜二年二月六日

第七

賦何墻連歌

薫りきて花に夜長し雨の中　玄哉
露ふきみたす風の青柳　文閑
ぬる程もあらぬ胡蝶の宿かへて　右運
野はゆく〳〵も暮る秋の日　宗及
薄霧とみるも降そふ道のへに　英帖
そよめくや猶霜のをすゝき　宗仍
明るまて月にをしかの行かへり　心前
里こそなけれ山のかたはら　紹巴

(名ウ)一筋の橋は雲引ふもと川　昌叱
杣の入ぬるあたり木ふかし　白
たてかふる年かきりある宮柱　三大
氏のさかへもしるき神かき　了玄
玉鉾の道もさりあへぬ袖見えて　藤孝
御幸のかへさいそく小車　飛中
俄にもかり場や雪になりけらし　及
する葉しつまる風の篠原　帖
瀧川の波をしはしのかたしきに　仍
わたす舟まつ空の夜ふかき　前
遠近も分れぬ月に霧立て　巴
つらにをくれし雁そ啼なる　哉
いつのまにうつろひ渡る野への色　白
葉かくれなれやさける梅かえ　叱

(二)とり〳〵に囀るのみの聲はして　了玄
あまのかつきの浪の長閑けさ　三大
永き日もくらす難波の浦つたひ　飛中
雨さそひ來るむこの山風　孝
時鳥雲のいつくに過つらん　哉
おしむにかひも夏の夜の月　及
なれぬれはさすかにをくも憂扇　帖
わかれの露を人よとかむな　仍
朝霧にしはしたゝすむ門の前　前
となりの馬もまちつれてかふ　巴
かひかねや遠きしなの路行なつみ　三大
やつれにけりな雪のすか蓑　玄
守捨る冬田のかゝし風ふれて　孝
暮殘りたる末の一むら　白

(二ウ)野邊はたゝ春より後も立霞　仍
きゝこそなるれひはりなく聲　前
若草もはらはぬはかり庭ふりて　叱
池の汀はいつこなりけん　巴
龍鳥にかさりからめく舟よそひ　三大
ときをえらひて旅の門出　孝
かさねぬは身にかろかれや夏衣　帖
つみともならん人妻としれ　哉
玉はなほおもふあたりをさりやらて　巴
なるかみはたゝうき雲の上　白
海つらはけしきつきたる風の音　及
岩もくたくる磯のあら波　三大
さくやいかにゑそかちしまも春の花　前
かすめる月にあやし笛の音　帖

(三)灯のかけうらゝなる閨のうち　玄
よひふけぬ間に忍ひよらはや　飛中
あた人はよそのかへさもまつならひ　巴
めくれるほとにゑゝるさかつき　孝
爰かしこあかぬ詠の紅葉かり　白
しくれに露に猶ぬるゝ袖　叱
眞木の屋はいとゝ野分に荒果て　孝
かへの中にもしけき蟲の音　前
見えこしも夢とをさかる夜はの月　三大
つなくいり江をはなれたる舟　巴
涼しさやほとりに松の大井河　仍
暮はつるまて行やらぬ袖　帖
もろともにしたふ名殘の關をくり　叱
なみたをさへてかはす言の葉　及

(三ウ)繪にかける人ともさらにおもほえす　巴
つかへはおなしたらちねの跡　哉
うけつくや其家々の風ならん　玄
軒端におつる花の衣手　仍
音もなを柳につたふ鞠の場　前
あまそゝきせし雫かすめり　白
岩間より流れあひてや早瀨川　帖
筏のさほそ浪にまかする　飛中
外はまた暮ぬもくるゝ山のかけ　孝
はるけき谷のおくまれる庵　三大
月さへもらぬ木葉にふけ嵐　白
秋また淺き森の下道　叱
日くらしにもよほされてや蟬の聲　仍
さひしさをたゝ露もわすれす　及

(名)吾身をはなきになしつゝ捨る世に　孝
君をたすくる人のたゝかひ　巴
をこれるはほろふる國のもとひにて　三大
聞つたへたるもろこしのみち　仍
いかはかり吉野のおくのふかゝらん　前
めつらしと見る今朝の初雪　白
山里のかきねつゝきの卯の花に　哉
一木櫻は春にをくるゝ　叱
浪の音霞にしつむ須磨の浦　飛中
翅わかれて鴈おつる空　巴
かつむすふ夢より後の夢もおし　帖
なみたの露も跡にまくらに　白
きぬ〳〵の又寢の床の月もうし　玄
たか袖の香を身にはしむらん　叱

(名ウ)うすけれと色のゆかりの藤はかま　三大
七日々々をとふかかなしさ　孝
すむもたゝおこなひ人の室の戸に　及
石をたゝめる山の井の水　前
かたそはをおり行道のはるかにて　叱
つくるはかりにかへるふる畑　哉
花の木を折かけかこふ賤か庵　巴
竹の陰なるくれなゐの梅　玄
玄哉　七　紹巴　十一
文閑　一　昌叱　九
右運　一　白　九句
宗及　七　三大　九句
英帖　八　了玄　七
宗仍　八　藤孝　九
心前　九　飛中　五

元龜二年二月七日

第八

賦初何連歌

木がらしを花にうらむる杉間哉　昌叱
山もおほろの曇明(アリアケ)のころ　英帖
したひ行狩場の鳥の鳴立て　宗圭
はらひもあへぬ衣手の雪　了玄
さす舟も早瀬の波のくるゝ日に　心前
涼しさうかふ水のまに〳〵　紹巴
風見えて散や一葉の柳陰　宗及
色あらはるゝ茅はらかやはら　三大
(名)をきかふる霜や露より深からし　白
かりねの枕おくるあかつき　藤孝
關の戸のゆふつけ鳥を聞初て　玄哉
しはしとゝむる駒いはふなり　宗仍
冬木にも殘る紅葉の山かくれ　飛中
峯かたわけてみそれせし跡　叱
立歸る夕の雲の中空に　帖
つねなき風やさそふ身のはて　前
高鹽もなをいかならん須磨の浦　玄
波にまかする難波江の舟　及
月くらき後さへ鐘はさやかにて　巴
霧にこもれるしのゝめの山　白
秋かけて鳴鶯は春もいさ　三大
みになる梅は立枝色つく　哉

(二一)柴栗をそのまゝ園の墻ほにて　孝
雪にうつめる草ふきのかけ　飛中
分かへる道は野風の吹くらし　仍
木こりの笛のとほき岡こえ　巴
(カケハシ)棧や雲ゐる中につゝくらん　叱
岩の上よりおつる瀧川　帖
水にすむ魚をせ(蓋)うひ(狗)の心にて　孝
はすのうき葉そ波にかたよる　白
やふれたる障子の繪さへ古寺に　前
かゝけもつかぬ常のともし火　三大
秋霧のうちも螢の幽にて　巴
いてなんも又月おそき比　及
いそくには明る夜なかき旅の宿　叱
都はいくかちかくなるやま　哉

(二二)神事(クハウザ)もことにしらへを心みて　圭
豐のみそきのたをやめの袖　三大
面影はあまたか中にわすれめや　哉
おもふにたるゆかりたつねん　前
いはけなき程よりむすふ契りにて　飛中
しるしの帶にあはれさそふ　孝
ぬきをくも形見のための唐衣　及
春のかすみの天のかくやま　叱
打散や消んともせぬ花の雪　白
水泡にまかふ梅の木かくれ　巴
川上の雨や雫に殘るらん　仍
うつろふ月は軒のひま〳〵　玄
はつかにもおつる梢の秋さひて　右運
鵙啼ころは山のかたはら　帖

(二三)郭公高根の雲に跡絶て　巴
あはれ今朝まて夢の手枕　白
逢見るにいかにうらみをわするらん　孝
鬼神もやはにくむへき人　叱
言の葉もやはらくこそは心なれ　三大
ひなよりかへり都にそすむ　巴
問よりも宿りはおなし泊瀨山　前
花はむかしの香こそしるけれ　仍
かすめるも我身ひとりと見る月に　飛中
あたりもさひしふる跡の春　哉
汲絶し水は氷のとちそひて　帖
枯葉ましりにかゝる萍　前
菖蒲こそ昨日の軒の妻ならめ　叱
露を名殘のなか雨の空　玄

(二四)秋(ミヲ)とし る涙の袖をまきほさて　三大
かへし身にしむ文のいくひら　孝
月にはとおとろかす夜もつれなしや　前
たゝく戸さしのうちにぬる聲　巴
隱家にうき世のつてはきかしとや　及
すめるかたへのふかき小野山　仍
音無もをとある瀧の木間にて　巴
水上はるゝ五月雨の空　叱
藻鹽火の煙や風のまゝならん　白
まはらにあめる小屋のあし墻　孝
馬はたゝ砌をちかくはなちをき　飛中
かよひなれたるあけまきの道　玄
かうふりも得まほし君の宮仕へ　三大
かくる車にひきもかへはや　哉

河岸の田面も水は猶たえて　熊千代
雨かとはかりそよく竹の葉　白
涼しさや秋たつ比の露ならん　仍
所々の野へのむしの音　前
萩か枝の月もてあそふ袖見えて　叱
霧のうへなるたかまとの宮　孝
夕間暮樓はあつさやしらさらん　帖
たゝしら波の中に行舟　巴
川つらの柳も花にかくろひて　前
空のみとりは霞なりけり　三大
打靡春たつけふの朝朗け　哉
玉ものすそもあらたむる色　叱
分てしも時にあふ身はしるかれや　玄
えらへる哥もいにしへの人　及

聞にたたるひすの國の聲はうし　巴
あかき出たる馬はあやしな　前
つなくをや侘しらましらさけふらん　熊千代
袖さすかなる岩はしの末　仍
おらはやも櫻は瀧つ上にして　孝
日もくれなる井のつゝしさく陰　白
ほのかなるいもか衣やうす霞　哉
旅にしおもふふる里のかた　帖
昌叱　十　白　八句
英帖　七　藤孝　九
宗圭　二　玄哉　八
了玄　六　宗仍　七
心前　十　飛中　五
紹巴　十一　熊千世　二
宗及　六　右運　一
三大　八句

元龜二年二月七日

第九

賦何水連歌

都人まちてまたるな山櫻　藤孝
たちいつる野の袖のあさ鷹　心前
すみかへる霞の衣かさねきて　飛中
またふりそふや春のうす雪　宗仍
若草の末葉の露のむすほれ　紹巴
こまのつなてもはなちかふ暮　玄哉
行かたははるけき月の宿かりて　了玄
旅はねられぬ秋かせの音　宗及

舟の上も夜さむの波のこすはかり　昌叱
かりや翅の水はらふらん　英帖
霜になをしほれあしまのあらはれて　白
かこふもかけはかりの草ふき　三大
春あさき野へは霞のたえ〳〵に　右運
風にはよはしいとあそふそら　孝
なれ〳〵て花に柳にとふ胡蝶　前
おしむも袖はいりあやになる　飛中
ひかふるに戸さしあやなきから衣　仍
人たかへとのことの葉もうし　巴
使さへあた〳〵しきはにくかれや　哉
契りおきしもすくる度々　玄
おき居つゝなかむる月の夜は明て　及
花にそわたる野分めく庭　叱

(二)いましはとなき絶ぬへき蟲の聲　帖
くれてやすらふ玉ほこのみち　白
涼しさに露分衣行かへり　三大
しけりあひたる森の木かぐれ　前
大御田に水のなかれをせき入て　叱
海をへたつる住よしの岸　哉
更渡るうちのはしひめいかならん　巴
月と霜とに寒き夜の空　孝
古郷の夢はあらしのかり枕　飛中
かたふく軒の山ちかきかけ　仍
かさにぬふみきりの松の年をへて　前
うくひすきなく梅の花園　帖
たちそむる今朝こそ春の薄霞　白
硯のとかにこゝろむる筆　三大

(三)菱つるやすかの葉にしもかゝるらん　巴
こほらぬ沼に鵠のおりゐる　前
ふしつけは所々に雪ふりて　哉
行やよと野の道の末々　及
旅たつをみをくる名殘いかはかり　仍
せきあへぬ袖のなみたかなしも　玄
ことはりも思ふかきりはいひやらて　三大
ねちけかましきうらみはかなや　叱
まつりことあつかりまうす程もへぬ　孝
寺もすかたは神さひにたり　飛中
こすのひまきなる衣の色にして　巴
瓶にさしてもやまふきの花　三大
くむさけもあるしまふけの春の月　叱
あられはしりのこゑそたえなる　哉

(二)難波津はいはけなきよりしるかれや　叱
乘ならひての波のあま船　巴
いくたひかとりて歸れるかいつ物　前
ましはりあかぬえひのさかつき　仍
心なをとはすかたりにあらはして　巴
うらみのあれはうちそむく人　白
君か代のほかこそなけれすみ所　及
もとめてもなにわらひおる山　叱
やく畑のあたりは花の根を絶て　玄
雨に鳩なく春はさひしも　飛中
かけたかきいらかのかはら殘る日に　孝
風のいたやはやふれたる月　熊千世
あらひほす衣は霧に猶ぬれて　帖
ふか田かりつゝかへる賤の男　孝

(三)風さゆる眞砂の上の夕千鳥　前
みきはや波のたかくうつらん　巴
とまかくるたなゝし小船こき出て　孝
霧のしつくの山まつの陰　叱
朽るこそみとりの莓の色ならめ　運
世をすてゝすむ袖は冷し　仍
わすれてはおなし都と見る月に　飛中
おちふれにたる身はあはれなり　帖
つみにあたる後には友もとひたえて　孝
いひなしによることはさかなし　前
誓ひをはなにのためにかさたむらん　哉
いつはるこそはこゝろくせなれ　白
尋ぬへき花よりさきの峯の雲　三大
松のひゝきにかすみきえたり　及

永日のゆふへは鐘のうらゝにて　玄
かちをたえてややすむ舟人　飛中
くるしみの中にたのしむ一ねふり　巴
れいならぬこそかつはをこたれ　及
たゝります神もしつむる道有て　前
しなとの風の雲はらふ空　孝
北はまつ冬たつ雨の暮る日に　叱
からすとひ行江こそとほけれ　帖
河嶋の松の梢も波かけて　仍
里とはしるく布さらしをく　叱
うつこともうすき衣やいそくらん　三大
ふたりねんたにつらき秋の夜　巴
待わふる月とは人もしれかしな　白
あくるひかしのとはり露けし　孝

花も先外より匂ふ宮のうち　巴
さくも木たかき陰のなしつほ　前
かた山の霞をかきの里見えて　帖
くちし所やいつこおのゝえ　三大
杣人のつゐにはかなき身の向後　熊千代
筏や岩にせきおとしけん　哉
五月雨の跡はみかさの音そひて　白
田面をしなみ青みこそすれ　文閑
藤孝　十　昌叱　十
心前　十　英帖　七
飛中　七　白　七句
宗仍　七　三大　八句
紹巴　十一　右運　二
玄哉　七　熊千世　二
了玄　五　文閑　一
宗及　六

元龜二年二月七日

第十

賦唐何連歌

袖ふれて花の香とりの宮居哉　三大
藤なみこゆる露の玉垣　白
雨そそく池の蛙のうかひ出て　紹巴
田中の道はあせのかたはら　昌叱
一むらや竹の煙にこもるらん　了玄
きぬたの音も暮ふかき空　心前
かけもはや秋さむき夜の月見えて　宗仍
色にもましる草むらの霜　藤孝

吹まよふあらしの跡を分る野に　玄哉
をくるゝ袖の宿りはるけし　英帖
ゆく〳〵も雲を伴ふ山路にて　宗及
いま一聲をなけ郭公　飛中
あかつきのね覺さひしき草の庵　文閑
寺をとなりの鐘のまちかさ　三大
落葉せし林はかけもふかゝらて　白
月のひかりの夕霜のうへ　巴
白妙のきぬにそよめく秋の風　叱
身にしめてまつ戸さしはかなや　玄
哀なを妻こふ鹿に音そへて　前
夢より後もかたしきのやま　仍
めかれせぬ櫻ちりつむ木の本に　孝
春の日數はいくかへぬらん　哉

半天に立かさねたる朝霞　帖
をくるゝかりも歸りぬるこゑ　及
苅人の迹よりつたふあしはらに
生ふるそろ蘭や末のみなと江　叱　孝
かた〳〵の水の田面の暮初て　飛中
雨はれぬらし山もとの里　前
一とをり雲に見えたる泊瀨風　仍
杉間ほのかになれる月しろ　白
色はなほはつかなりしも散はてゝ　巴
人の秋より名はもれにけん　三大
つかさめし過ぬるころと契をき　及
とをきあかたは春をこそまて　哉
いくへとかつもれる雪の山ならん　玄
しくれのあとの雲のむら〳〵　帖

鹽かまや數もあまたにけふらせて　及
みきりをひろみ殿作せり　白
小車もいるへき程の門なれや　前
なをゆふかほのよそめあやしも　巴
誰にかはたのみかけたる玉かつら　仍
身ならぬおもひやよいかにせん　三大
とり見るにやつれ驚くます鏡　叱
立かへりての旅のひさしさ　前
漕出し船にむかへる沖津波　熊千代
かすみにあくる海つらの山　飛中
春の夜の月のよこ雲先消て　孝
とたえては又花にほひ來ぬ　哉
秋草のしほるゝ中のそのゝ菊　巴
こてふはねつゝ蟲のなく暮　宗圭

薄霧のまかきもかつはひま見えて　玄
と山はまたきはつ雪の色　巴
谷川のかたへはむすふあさ氷　飛中
さはきたちたるをし鴨の跡　孝
爰かしこみたれうき藻の岩つたひ　前
松の下枝そくちてかたふく　帖
しめ繩は神のやしろにかけ捨て　叱
きねかつゝみの音もふりけり　白
とき〳〵にうちしはふける暮さひし　巴
しのひむかへもことさらにこそ　及
うきはたゝみとりの袖のうらみにて　仍
しはしはゆるすみはしなりけり　叱
宿直人おりにしたかふ月の夜に　哉
ものゝけはひもすさましき比　孝

虎のふす野らかと秋の風をあらみ　巴
くれてはしけしおほかみのこゑ　前
むなしきを送り捨たる草の原　叱
つゝみのすゑにかゝるたかしろ　巴
似るをたにそれを名殘の物おもひ　三大
ふたりして子は生したてはや　圭
啼わたるやもめからすの哀にて　飛中
しらぬ深山をたとり來し道　孝
松杉や花の木陰をたのみをき　前
かこひつゝなをもる家さくら　帖
日くらしにかすむかた野のかり衣　哉
かへるさとほき柴人のこゑ　仍
あゆみさへつかるゝ牛にむちうちて　孝
ふきすさみたる月の笛竹　玄

明かたになるらん秋の里神樂　巴
あたゝめ酒をくむもいく度　前
よはひをもたもつ心や生藥（イククスリ）　白
ことはりしるし法のしな〳〵　及
むまれんは天にかきらぬ身の行衛　帖
つらなるえたに契りをく中　叱
めの前にかはること葉よいかならん　玄
うしろのそしり人はたのまし　三大
よしあしもとりなしによる新まいり　仍
ゐ中ひたるもたゝよそひなり　巴
竹あめるかきをすま井のさすらへに　叱
またゝきあへすほそきともし火　哉
おこなひもをはりて後の夜はの月　前
れいならぬ身も秋にをこたる　孝

露（ツユ）はかりとくる心になくさみて　哉
つれなきとても何かたえまし　仍
かこつにやおもはせかほもしるからん　白
ちかつけはまたとほさかる人　飛中
花にいる袖はさなから峰の雲　叱
けふの御幸の野へのゝとけさ　孝
風は今みやこの春におさまりて　三大
みちたゝすよりなを和哥　熊千世

三大　七句　玄哉　八
白　八句　英帖　六
紹巴　十一　宗及　六
昌叱　十　飛鳥井中將　六
了玄　六　熊千世　二
心前　十　宗圭　二
宗仍　八　文閑　一
藤孝　十

元龜二年二月七日

追加

賦何人連歌

しめのうちの花にはよきよ春の風　了玄
いくへかきほのかすむ杉むら　熊千世
鴉なく山は入日に雪消て　周竹
月や時雨の空になるらむ　康之
いをねぬや草をかたしく小夜枕　求政
夢さへとをきみやこなりけり　前廣
舟はたたゆくにまかする波の上　通長
川のほとりの里のにきはひ　廣次

索引

ア

明石（源氏物語）……一四八
秋……五五、六八、七七、七九、八一、九四、一〇〇、一〇六、一〇八
秋の本意……一三一
秋風……一〇九
擧句（揚句）……三、五、六二、一〇三―一〇五、一二四、一二五、一四六、一五五、一六三、一六四、一七〇、一七一、一九九、二三七
あげくのはて……一九九
明智光秀……五六、五七、七八、一五一、一五二、一九七、二一〇、二二一
朝……一〇九
朝何……一五
葦名氏……一五〇、一九六
飛鳥井中將……八
愛宕山（社頭興行）……一五、七八、一九七、二一〇
阿佛尼……一八九、一九一
葵（源氏物語）……一四八
雨夜記……一四〇―一四四
荒木田守武……二二三、二二四
有明……七六、七七、七八、一〇九
青梅……一一〇
青何……一五

イ

石井了心……一五七
一座……三、四、五、一〇七
一座一句物……八一、八二、八三、一〇七、一〇八、一一六
一座五句物……一〇八、一一〇
一座三句物……一〇九
一座四句物……一〇九
一座二句物……一〇七、一〇八
一字名……八、二六―二三
一順……一六三
一順箱……一六五
一字露顯……一七、一八、二〇、二一
一條兼良……二一、一〇六
一萬句（萬句）……二、六、一五一、一九二
一句にて捨つ……一〇七
一句に理なし……五三
一句の物（一座一句物ニオナジ）
伊豆三島神社……三九、一五〇、一九六
言ひ捨て……五
今川氏親……三九、六五、一五〇、一九六、二一〇
伊與千句……四一

ウ

浮橋……一一〇
動物……一〇八
有心……一八三、二〇四、二一三、二一四
薄何……九
薄何百韻……六六
歌連歌……一三五
打越……二一、二二、二三、二四、一四四、一四五、一七〇
可嫌打越物……一一七、一一九
卯月……七八

産衣……三三、八七、八八、九二、九九、一〇六、一三二、一三六、一三二、一三三、一五四、一六五
馬……八一、八二
梅……一一〇
裏……三、一五五
裏（初折裏、初裏ニオナジ）
裏八句（名殘裏）……一六一
植物……一〇八、一三二、一三三

エ

永閑……一〇
縁語……一三九、一四〇

オ

應安の新式……一〇六、一一一
同じ面……三
同面を嫌ふ……一一七、一一八、一三〇
同じ懐紙（同折）……三
同折を嫌ふ……一一八、一一九、一二〇
鬼……一二一
大君……三三、三四
大伴家持……一八二
大原野十花千句……一五八、一六〇、一六四、一七一、一七四、一七六、一八八
大原野神社……一九〇、一九二、一九五、一〇一、一〇二、一〇四、一二八、一二七、一二三、一二四、一六六、一六六、一〇〇
「おほろけの月」……四三
御……九
表……三二
面（初折表）……三、一四六、一五五、一六一、一六二、一七〇
面四句目（第四の句ニオナジ）
面十句……六、三六、八三—八五、九五、一一六、一一七、一二四、一二五
面十句に嫌ふ物……一一五
面十句の内に用ゐざるもの……一六五
面十句の内に用ゐるべきもの……一六五
面の連歌……八二
面八句……五、六、八一—八三、一六一、一九九、二二三
面を替へて用ゐるべきもの……一一七
面を嫌ふもの（同面を嫌ふニオナジ）

カ

柿本人麿の像……一五一
梯……一一〇
賭物……一六一
數の字……一一〇
歌仙……二四、二三一
「かな」……四五、五四
鐘……一〇九
河越千句……四〇、六六
下賦……一四、一六
上句……二
神代……一〇九
漢語……一二六
漢和……一〇〇、一〇一
唐何……九、一〇、一四、一六
雁……一〇八
家隆卿……一八三

キ

木と草……八一
季（季節）……四三、一二九—一三一、一三四、一八七、一八八、二一八、二一九
季の無き句……七三
祈禱の連歌……四〇、一三〇、一五一、一九六
北野神社……四四、一五一
北野神社法樂千句……一八、一九
北村季吟……九四、一〇七、一〇九
吉川廣家夢想之連歌……七二
急……八五、一二五、一五五、二二三
君が代……一〇九
君は非人倫……三三、三四
君は天子只一人也……三三、三四
狂言……一九八—一九九、二〇九—二一〇
京都博物館……八
爲京都亂劇祈禱……一五一
行祐……五六、五七
居所……七五、八二、八三、一〇七
於清水寺名所連歌百韻……六五
嫌ふ……一一〇、一一一
嫌物……一二五
桐壺（源氏物語）……一四八
切字……四五—四七、一九〇

ク

句……二—三、（以下略）
句の去り方……一六五
句の制限……一六七
句のつゞき……一六七
句のつゞきの歎……一六五
句を吟ず……一五九、一六〇、一六一
句を催す……一六〇
句上……七、一六二、一六三
句柄……一二九、一三〇、一三七
草と木……八七
草と草……八一
熊千代……三八、一八〇
群書類從……八
懐紙……三、六、八、三二、三六、三五—一六一、一六四、一八〇、一九七、一九八、二二一
懐紙かはりて可有……一八八、一九一
懐紙の書き様……一五七—一五九、一六四
會席……二

ケ

稽古連歌……一六四
元久の詩歌……三八
兼載……一五〇、一九三、一九七、二〇八
玄哉……八
源氏物語……一四六—一四九、一九二—一九四、二〇七—二〇九
玄仍……八
　玄仍の七百韻……五、七二
建治の新式……一〇六
顯傳明名錄……二七
「けり」……五八
「けり」止まり……七二、七三

コ

興行……四
紅梅……一一〇
五ケ……一五
古今傳授……一九五—一九六、二〇五—二〇六
五句つゞく……一〇七
五句の物（一座五句物ニオナジ）
可隔五句物……一二四
國語學……二二六
國體の認識……一三三
湖月抄……一九四、二〇七
五七五の句……二
後拾遺集……一六四
五十韻連歌……三八
　一六三、一〇一、一〇三、一〇四、二二一
詞（連歌の）……一二六
後鳥羽院……三五、一八三
後鳥羽院御廟……三六
諺……二二七
理……五三、一三〇、一三二、一三四、一三五、一三七
戀……五六、九四—九七、一〇〇、一〇七、一〇九
　戀の本意……一三二
氷……一一〇
駒……八二
聲の字（字音のことば）……一二七

サ

西鶴の文章……三四
坂昌功……五〇、一〇六
堺傳授……一九六、二〇六
作者の署名……二六
作文大體……四八
櫻……一一、八七—八九、一〇九、一五四、一五五
櫻の句に花をつくる……八七
差合(指合)……一二〇、一三二、一五五、一五六、一五八、一六〇、一六七、一九九、二二七
五月……七八
「淋し」……一〇九
雜……一五六
雜の句……七三、八一—八三
雜物體用事……七五
三吟……六
三句去……八一、八三
三句つづく……一〇七
三句のうつり……六八—七〇、二三一、二三三
三句のもの(一座三句物ニオナジ)……一七〇
三句のわたり……一四四
三句目……一一三
三句を去るべきもの……
可隔三句物(上ニオナジ)……七一
三字假名……九四、一〇八
三字中略……一一四
三の裏(第三の裏ニオナジ)……一七、一八、一九、一二一
三の表(第三の表ニオナジ)……一四九—一五三
三の折(第三の折ニオナジ)……一六四
三條西公條……一九五、二〇六、二〇八
三條西實枝……一九五、二〇六、二〇八
三條大納言實澄……八
三條西實隆(逍遙院)(聽雪)……一〇、一二、七三、一四九、一九五、二〇六
三條西實隆(逍遙院)(聽雪)……七五、八二、八三
山類……一一〇、一一一、一二〇、一二三、一二四、一二六、一二八、一四〇
去嫌……一五五、一五六、一六〇、一六七、一九九、二二五、二三七
去嫌の法……八〇
去る……一一〇、一一一

シ

詩……一六五
袖珍歌枕……二〇〇
式目……四、一〇六、一一一—一一四、一六五、二二五—二三六、二三九
四句の物(一座四句物ニオナジ)……二
四句目(第四の句ニオナジ)……
四句目ぶり……七一
しぐれ……九四、一〇八
字去り……一一四
時世に卽したる句……一四九—一五三
下書……一六四
下何……一五
七句を去るべきもの……一一四
七七の句……二
七七の句にて止む……一六三
七百韻……五七、七二
「して」止まり……一〇二
柴……一三三
十ケ……一五
十花千句(大原野十花千句ヲモ見ヨ)……九、一〇、五〇
執筆……八、一一〇、一五六、一五七、一五八、一五九、一六〇、一六一、一六三、一六四、一六五
執筆の作法……一五九
入韻……二
至寶抄(連歌至寶抄ニオナジ)
神祇……一〇七
心敬……一五九
新在家……二二、二三
新在家宗匠……二三

新在家文字……三二、三三
神像……一五七、一五八
新式(連歌新式ニオナジ)
新式今案……七四、一〇六
新式抄……一八、六一
心前……八、七二
新撰菟玖(筑)波集……一三八、一九三、二〇五
新撰筑波集撰集祈念何人百韻……一五〇、二一〇
人倫……一〇八
下句……二
昌休……三六、二〇八
正花(まさしき花)……八七、九二、一五三、一五四、一五五
正花にあらざる花……八九—九二
昌叱……八、六六、二二四
昌純……一八
上賦……一四、一六
正風……一八八、二二四
釋教……一〇〇、一〇七
呪詛……一五一、一九七
述懷……八五、九七、九八、一〇七
出陣千句……三九、六五、一五〇、一九六、二一〇
純正連歌……一三九
俊頼抄……一九〇
序……八五、一二五、一五五、二三三
勝持寺……七、八
初裏(初折裏)……一六一、一六二、二二三
初表八句(面八句ニオナジ)……二二三
初心の人……一五八—一五七、二二五
諸藩……二二二
署名(作者)……二六
初折……三、五、一一〇、一五五、一六三
初折裏(裏)……八三、一六一、一六二、一七〇、二二三
初折表(面ニオナジ)
白何……一五
詞林三智抄……二六

ス

水郷春望……二八
水邊……七三、一七〇
水邊體用事……七四

セ

紹永……九
逍遙院實隆……七二
照高院道澄……八
紹巴……八、三五、四七、四九、六四、六六、九五、一六六、一九七、二〇八、二一一、二一四、二二〇
紹巴追善連歌……七二

ソ

宗因(西山宗因ニオナジ)
宗鑑(山崎宗鑑ニオナジ)
宗祇……九、一九、三三、三五、三六、三七、五六、六五、六七、七一、九五、一四九、一五〇、一五九、一六六、一八〇、一八四、一九〇、一九一、一九三、一九五、一九六、二〇五、二〇六、二〇八、二一〇、二一四、二二〇
宗祇一回忌追悼連歌……一五〇
宗祇形の文臺……一五九
宗祇獨吟……一五二
宗匠……一二〇、一五七、一五八、一五九、一六〇、一六四、一六五、一八一、一九五
宗砌……一一
宗碩……一〇、四〇、二〇八
宗長……一〇、一五、三六、三七、三八、五九、四〇、五六、六五、

六六、七二、一五九、一四〇、一四〇、一八〇、二〇八、二一〇
宗牧……一〇、七二
宗養……三六、六七
惣禮……一六四
續群書類從……四、一一、一八〇
俗語……一二六、一九九
聲物……八〇、一〇七、一一三
空……一一〇

タ

體……七三、七四
體言止め……五八、五九、七一
第三(の句)……二、五、六三、六七、七〇、八六、一一七、一二五、一四六、一五五、一五八、一六三、一七〇
第三の句がら……六八
第三の折……三、一〇三、一四六、一七〇、一二三
第三の裏……三
第三の表……三
第四の句……二、三、五、七一、一一六、一二五、一七〇、一七一
太神宮奉納兩吟千句……四〇
太神宮法樂伊與千句……四一
第二の折……三、九八—一〇三、一四六、一七〇、一二三
第二の裏……三
第二の表……三
體用……七三、八二、八三、一〇七、一四五、一二七
體用の區別明かならぬもの……七五
たけたかく(き)……四七、四八、六八
龍……一二一
伊達忠宗……一五一
旅……九三、九四、一〇七
田宮仲宣……二三
短句……二
檀林……一八四、二一四

チ

千早城……一九二
地名……六〇、一〇八
地文(ヂモン)……九八
長句……二
聽雪……一〇、一四九
勅撰……二〇四
勅撰集……一九二、一九三
地連歌……九九

ツ

月……七五—七九、一二四、一二五、一五五、一七〇、一九一、二一九
月の座……六二、七六、二一七
月千句……一一
月次の月……七七
菟玖(筑)波集……四三、一三八、一九二、二〇四
付合……八四、一二四、一三七—一四四、一四五、一六七、一六八、一七一、一七二、一二二、一二二
付合可用書……一六五
付合小鏡……一四八、一六五、一六六
付け方……五一—五三、一三八
付句……五一、六八、六九、七〇、八五、一三八—一三八、一四〇—一四二、一四四、一六〇、一六三、一六五、一七〇、二一七、二二七
付句の拘束……六二
付句の仕立方……五四
徒然草……一六一
追加……六八、九一、一一
追善の連歌……二一〇
追悼の連歌……一五〇

テ

定家卿……一八三、一九一、一九五
亭主……一五七、一六〇
貞德(松永貞德ニオナジ)
貞門……一八四
「て」と「て」……八一、八三
「て」止まり……六三、六四、六五、八一
「て」止まり(下の句の)……一二
手何……一五
天水抄……三六
天滿宮の神像……一五七

ト

同季……五六、一一四
同字……一一四
同字五句去り……一五五
東常縁……一九五、二〇六
東屬子……二二
德川家光……一五一
獨吟……六、五七、一五七、一六四
獨吟百韻……一五一
獨吟千句……一八、一九
怒誰……七九
遠輪廻……一四五
富山藩の連歌……一八一
虎……一二一

ナ

中書……一六四、一六五
長連歌……一〇二、一〇三、一〇四
名殘……三、一〇三、一五五、
名殘の裏……一六一、一六二、一七〇、二三三
名殘の裏の月……七五
名殘の表……三、一六一、一六二
名殘の折……三、一〇三、一一〇、一四六、一五五、一七〇、二三三
夏……五五、五六、一〇七
夏の本意……一三一
夏月……七六、七七、一〇九
何……一四、二〇、二二、一八一
何馬……九
何墻……一三、一六
何木……九、一〇、一五
何衣……一五一
何田……九、一二、一六
何手……一八、一九
何花……七九
「難波の蘆は伊勢の濱荻」……一四五
何人……九、一一、一二、一三、一五、一六、二七、二六
何人百韻……三七
賦何人連歌……一八〇、一八一
何袋……一〇
何船……一〇、一三、一五、一六
何路……九、一〇、一一、一二、一五、一六、一七、一四
何水……一三、一六
「ならん」……六六
「なり」止まり……七二、七三、一〇二、一一〇

ニ

二句以上つゞかず……一〇七、一〇八
二句去るべきもの……一一一、一一二
二句唱和の連歌……二〇二、二〇三
二句の付合……一七〇
二句のもの(一座二句物ニオナジ)……一一一、一一二
二句を嫌ふもの……一〇二
「にして」……一一、一六、一七、二一、二二
二字反(返)音……九、一〇、一五
西山宗因……一八四、二一七
「にて」……六五
二條家(歌道)……一九六、二〇五、二〇六
二條良基……一〇六、一四六、一八三、一九一、一九二、二〇四
「に」止まり(下の句の)……一二二
二の折(第二の折ニオナジ)
二の裏……三
二の表……三

ヌ

「盜人をとらへて見れば我が子なり」……三七

ネ

年號月日のしるし方……一六三

ハ

破……八五、一二五、一五五、二三三
俳諧……四六、七八、七九、一八五、一八六、一八七、一九〇
　一九一、一九二、二二三—二二七、二二九—二三三、二三四
　俳諧の連歌……一八四、二二四
白……八、二六、五七
幕府の連歌……二二二
はこび……六四、一三八、一四四—一四六
橋……一一〇
芭蕉……四六、一八四、一八八、一九〇、一九一、二二四、二二五
八句連歌……一九八—一九九
蓮の莖……一三九
發聲……一五八
初何……一〇、一四、一五、一六
初折（ショヲリヲ見ヨ）
花……八七、九二、一〇九、一二四、一二五、
　一五三—一五五、一九一、二二九
　花の句……六、八六—九二、一七〇
　花の句に櫻を付くる……八八
　花の座……六二、八六、二二七
　花の本意……八七
　花ノ寺……一五、一六
　花何……八
　花之何……一五、一六
　花の下……一一
　花の本衆……二三
　花紅葉……九二
　はね字……一九六、二〇六
　林宗二……五五、六八、九三、一〇七
　春……一三〇—一三一
　春の本意……一〇九
　春風……一〇九
　春の風……七六、七七、七九、九九、一〇九
　春の月……一一〇
　春の雪……

ヒ

火……一一〇
披講……一一〇
光物……一一三
比興抄……一三九
「ひさご」……七八
一卷……二、三、一一〇、一四六
一卷のはこび……一四五—一四六、一六七、一六八
一卷の美……二三—二三五
獨連歌……六、一五七
一折……三、六
　一折を嫌ふ（同折を嫌ふニオナジ）
病氣平癒の祈禱……一五〇、一五一
百韻の連歌……二、三、四、三五、一〇七、一〇八、一一〇、
　一二一、一三五、一六四、一九一、一九九—二〇〇、
　二〇二、二〇三、二〇四、二〇八—二〇九、二二一
　百韻に五つの物（一座五句物ニオナジ）
　百韻に一つの物（一座一句物ニオナジ）
　百韻に二つの物（一座二句物ニオナジ）
　百韻に三つの物（一座三句物ニオナジ）
　百韻に四つの物（一座四句物ニオナジ）
平句……三、五五、六四、一五二

フ

「賦」（の字）……一五九
賦物……六、七、一一、一四、三八、一二二、一五九、一六一
　賦物のとり方……二〇
賦物篇……一二、一六、一七、一八
藤孝（細川藤孝ニオナジ）
文教溫故……三二、一三
文臺……一五八、一五九、一六一
可分別物……七四
發句……五七
發句は客人……一五八、一五九
發句人……一〇六、一二三、一五六
法式……三六、四一、一一〇
法樂……一五〇
法樂千句……八七、一二九—一三七、一七四、二一九—二三〇
本意……一四六
本歌證歌の條……三五、八三、一〇六
本歌取……六一
本式……一〇八
本歌……一五八、一五九
まさしき花（正花ニオナジ）
增鏡……九五
待かぬる戀……一〇九
松風……一八四、一九四、二〇七、二〇八、二一三
松永貞德……五一、五二、五三、一二四、一三八、一三九—一四四、一七〇
前句……一六三、一六四
滿吟……二、六、一五一、一九二
萬句（一萬句）の連歌……一六三
「丸」……七六、七七、一〇九
三日月……一八三
三島神社……二九、一五六、一九六
水引……一六三
三つ物……七〇
水無瀨三吟（百韻）……三六、五七、五九、六一、
　六四、六八、八七、九〇、九六、一〇四、一〇五、
　一二九、一五二、一六六、一七一、一七二、一八〇
水無瀨宮（離宮）……三六、三八、四三
源俊頼……一九〇、一九一
美濃國河瀨方十花千句……九
御階……一一〇
宮……一一〇
見渡……三
　ム
無言抄……三三、四九、五七、五八、五九、
　六三、七六、八二、一〇三、一一一、一二五
夢想之連歌……七二
無心……一八三、一八四、二〇四、二一三、二二四
無常……八五、八六、一〇〇、一〇七
　メ
明月記……一八三
名所……五〇、五九、六〇、一〇八
名所祈禱獨吟何人百韻……一五〇
冬……五五、五六、九四、一〇七、一〇八
冬月……七六、七七、七九、一〇九
降物……八〇、一〇七、一一三
　ヘ
平凡の句……一七二
表佐千句……九
反句……一六六
　ホ
奉納連歌……二一〇
細川幽齋（藤孝）……二〇六、二〇七
細川高國朝臣六々歌仙……四
細川忠興……八
細川藤孝（幽齋）……七、八、五七、一五二、一九五—一九六
牡丹花肖柏……一〇、一二、三五、三六、三七、五六、
　七五、一四七、一五一、一八〇、一九六、二〇六、二〇八
螢火……一一二
發句……二、五、七、一一、一二、三六、三六、四一、
　四二、四三、五一、五四、五六、五八、七〇、八六、一一七、
　一二四、一三五、一三四、一三六、一四六、一五一、一五五、
　一五八、一五九、一六三、一七〇、一八〇、一八一、一八五、
　一八六、一八七、一八八、一八九、一九〇、一九一、一九七、
　一九八、二〇〇、二一〇、二一六、二一七、二二八。

名所小鏡……一六五、一六六
名所連歌百韻……六五

モ

「もなし」止まり……六三、六四、六六
もみぢ……一一〇

ヤ

「や」……四五
野徑……七八
柳……一〇九
夜分……七九、八〇、一〇七
山崎宗鑑……一八四、二二三、二二四、二二七
山崎美成……二二
日本武尊の神像……一五七
山何……一〇、一一、一三、一五、一六
「山本かすむ」……三七、三八
山岡明阿……二三
遺句……九九

ユ

ゆうげん……四七、四八
ゆう付……一四〇
雪……一一〇、一九一
湯山三吟……五六
夕……一一〇
夕顔（源氏物語）……一四八
夕何……一五

ヨ

代（世）……一〇九、一一〇
用（ゆう付ノゆう）……七三、七四
四字上下略……
餘情幽玄體……一七、一九、二二
世久連歌……四八
世吉連歌……四
蓬生（源氏物語）……二、四、六、二一〇、二六三
寄合……四七
……一二九

ラ

「らん」……五八
「らん」止まり……六三、六五、六六、七三、八三、八六
「らん」と「らん」……八三

リ

輪廻……六九、七三、八六、一四五
兩吟……六
兩吟千句……四〇

類聚名物考……二三

ル

レ

連歌安心集……一六五、一六六
連歌歌……一三五
連歌會……一六三
連歌師……一八四、一九三、一九四、一九五、一九八、一九七、二〇五、二〇六、二〇七、二〇八、二一一、二一二、二一四、二一六
連歌師の修養……一九三、二〇九
連歌至寶抄……四七、四八、五三、五五、六四、六七、六八、八三、一三〇、一三一、一四〇、一五三、一五六
連歌集……一九二、二〇四、二二八
連歌新式……三五、六一、六二、六九、七四、八二、八三、八四、一〇六、一一二、一一三、一一四、一三二、一四六
連歌初學抄……一八、二〇、二一、一〇六、一一〇七
連歌初心抄……五〇、五九、八四、一二三、一六五
連歌諸體祕傳書……二二七、一六五
連歌答問……三六
連歌通用字訓……二三
連歌手引糸……一六五、一六六
連歌盜人……一九八

連歌祕抄……八四、一二二、一六五
連歌水廼月……一六五
連歌問答……三六
聯句（連句）……一六八、一八六、一九九、二〇〇、二二一、二二四
連衆……六、八、一五七、一五八、一五九、一六三、一六五

ロ

六百韻……五
六々歌仙……四

ワ

和歌と連歌との差……一二九—一三〇、一三四—一三六、二二〇
若紫（源氏物語）……四七
和漢……二〇〇—二〇一
脇句……二、五、五一、五五、五六、五八、六七、七〇、八六、一一七、一二五、一四六、一五五、一五八、一六〇、一六三
脇句のとめ方……五八
脇句は亭主……五七

ヲ

をしほ山……四二
女……一二一
折……三、一五五
折に一つ……一一〇
折を嫌ふ（同折を嫌ふニオナジ）……三
折紙……

8243

出版會承認 い80002號

昭和十二年四月二十日印刷
昭和十二年四月二十五日第一刷發行
昭和十八年十一月十五日印刷
昭和十八年十一月二十日第二刷發行

連歌概說 二、〇〇〇部

(本)定價二圓五十錢
特別行爲稅相當額 九錢
合計 二圓五十九錢

著者 山田孝雄
東京都神田區一ツ橋二丁目三番地
發行者 岩波茂雄
東京都神田區神町三丁目十一番地
印刷者 白井赫太郎

發行所 東京都神田區一ツ橋二ノ三 岩波書店
會員番號一〇二〇三七番
配給元 東京都神田區淡路町二ノ九 日本出版配給株式會社

落丁・亂丁に對しては責任を負ひます

精興社印刷(東東四一) 文共社製本